

# ラテンアメリカ「新左翼」は ポピュリズムを越えられるか？（下）

— ポスト新自由主義に向けたガヴァナンス構築の視点から —

松 下 冽

目次

はじめに

## I ラテンアメリカにおける「新左翼」の台頭

1. 民族的自立戦略の挫折
2. 新自由主義政策とガヴァナンスの危機
3. 「新左翼」の類型化と共通性
4. 変容する国際環境

## II 「新左翼」とポピュリズム

1. ポピュリズム再考
  - 1) 比較的・歴史的アプローチの有効性
  - 2) ポピュリズム分析のアプローチ
  - 3) ポピュリズムの歴史的差異
  - 4) ポピュリズム定義
  - 5) ポピュリズムの特徴
2. 急進的ポピュリズム
  - 1) 急進的ポピュリズムの特徴
  - 2) 社会的基盤と社会運動

## III 民主主義の視座から見たポピュリズム

1. 自由民主主義が内包する矛盾
2. ポピュリズムと「人民」
3. ポピュリズム空間の陥穽

4. ポピュリズム運動を超える参加の可能性 (以上, 2014, No.27-1号)

IV 参加型民主主義の現在: 可能性と制約

1. 急進的ポピュリズム型潮流の事例

- 1) 共通な二つの戦略
- 2) ベネズエラ・チャベス政権: 「下からの」動員と民衆参加
- 3) ボリビア・モラレス政権: 民主的モデルのアマルガム
- 4) エクアドル・コレア政権: テクノクラート型ポピュリズム言説と統治スタイル

2. 社会民主主義型潮流の事例

- 1) ブラジル: 審議型メカニズム
- 2) チリ: 埋め込まれた新自由主義

3. 参加型民主主義の限界

- 1) 継続する市民社会への国家統制
- 2) 左翼政権の行方と「国家 - 市民社会」関係の展開
- 3) ポピュリズムに委縮する「国家 - 市民社会」関係 (以上, 2014, No.27-1号)

V ポスト新自由主義に向けたガバナンス構築 (以下, 本号)

1. 自律的「国家 - 市民社会」関係の発展

- 1) 参加型革新を分析・評価する基準
- 2) 「ポスト自由主義」と「強い公共性」
- 3) 「代表制 vs. 参加」の二元論を超える多様性

2. 自律的市民社会は存在するか

- 1) 参加型制度から見る「国家 - 市民社会」関係
- 2) 参加型民主主義は自律的空間か
- 3) 党派性問題と参加型民主制

3. 社会運動と国家

- 1) 社会運動はどのように国家と関わるのか
- 2) 左派政権と社会運動が抱える課題

4. 新たな従属的制約: グローバルな資本と市場

- 1) ポスト新自由主義への障害
- 2) 資源輸出の問題性

5. リージョナルなガバナンス構築

- 1) リージョナル・レベルにおける国家 - 社会関係
- 2) 民衆によるリージョナル・ガバナンス構築への動き

おわりに

## V ポスト新自由主義に向けたガバナンス構築

### 1. 自律的「国家-市民社会」関係の発展

#### 1) 参加型革新を分析・評価する基準

これまで述べてきたように、ラテンアメリカでの民主主義発展は新たな段階を生み出してきた。多くの国では競争的選挙を通じて政治的エリートが選出されてきた。この政治的移行は民主主義が発展する契機としてきわめて重要である。同時に、市民が政府の諸課題に直接関与する様々な参加型民主主義の実験を積み重ねてきた。この意味で今日、民主的諸制度が再構成されつつある（松下, 1012 参照）。

参加はローカル・レベルで実践されたメカニズムだけでなく、国家全体を変革し、民主化するために利用できる民主的政策のもう一つの構想である。同時に、民衆の政治参加の新たな形態は、その目的、立場、制度的デザイン、規範、そして有効性は多様である。それは市民の間の、あるいは市民と政府との間での有意な熟議を形成する可能性をも創出している<sup>21)</sup>。

例えば、ブラジルの全国評議会（las Conferencia Nacionales）に見られるように、新しい参加様式は全国的な立法・行政過程に市民を直接統合し、公共政策の策定過程における代表制や責任性を拡大してきた。他方、ボリビアにおける自律的な先住民共同体では、選挙代表制と競合する別の参加型様式が見られる。それは、選挙諸制度のもとでこれらの共同体の要求に政府側がほとんど応答をしてこなかったことを背景にしている。また、前述のように、ベネズエラの地域住民委員会のような参加様式の事例もある。それは制憲的諸権力に対抗するチャベス体制のある種の「独裁的」傾向を確立するためにも機能した。だが同時に、ベネズエラのこうした参加型様式は、市民が一定の状況下で彼らを統制する政権の能力を超えて発展する可能性を否定できない。

こうして、ラテンアメリカの新しい参加の波は、この地域の民主化を理解し評価するために、また民主主義の意味そのものを熟考するのに重要な問いを投げかけている。すなわち、これらの新しい参加形態を確認し、政治システムとその関係、目的、提案を分析し、今日まで排除されてきた集団にどの程度まで、そしてどのようにして発言が与えられたのか、この問いを分析することが不可欠である。

マーク・E. ウォーレンは、ラテンアメリカにおける参加型の諸革新を分析し評価する際に3つの基本的視点の重要性を強調している。

まず第1に、それぞれの参加型革新を制度体系の一部としてそのコンテキストの中で考察することである（傍点、筆者、以下同様）。例えば、ベネズエラにおいて直接参加のメカニズムは、チャベスとその支持基盤を創出する1つの目的として機能していた。他方、ブラジルでは別の異なった目的として機能している。すなわち、ブラジルの場合、市民の保健サービスへのアク

セスが普遍的制度として拡大した。

第2の視点は、それぞれの特定の制度的形態から民主的規範を構成することである。それは民主主義を複雑かつ多様な構成要素を持つ概念と理解している。民主主義は少なくとも包摂、代表制、応答性、説明責任、そして市民の教育を伴う。それはクライアント関係を制限し、正義に関する先住民の規範を統合し、既存の諸制度への正統性を提供するための制度と実践を伴うことができる。しかし、あらゆる場合に新たな参加型様式が必然的にある種の民主的規範を強化するとは言えない。すなわち、参加の新たな様式は、あらかじめ重要な組織や資源を持っているアクターによって利用されうる。また、新たな類型のクライエントリズムの発展や専制的傾向の強化を促進しうる。

第3の視点は、異なる民主的規範に直面してその諸機能を評価したとき、分析されたそれぞれの参加型革新がそのコンテキストにおいてどのように機能するのか、この点を自問している。したがって、異なる局面で「参加」を脱構築できるので、それぞれの局面で民主主義を生み出すものが何かを問うことである (Warren, 2012:11)。

新たな市民の発言形態が選挙による参加に基づいた伝統的な代表制度に挑戦できるのか、あるいは補完するかどうか、その成り行きにとりわけ注目すべきである。この点で、マックスウェル A. カメロン等は以下の基本的かつ重要な問いを発している。

- ・新たな参加形態は、選挙以上に政府や官僚に対し責任をもたせるのか？
- ・参加はどこまで「現実的」か、どこまで「操作されている」のか？
- ・この参加は伝統的なクライエントリズムを再生産するのか、あるいは対立するのか？
- ・これらの制度は、政治制度を公共政策や政策決定に関して市民の要求により敏感になっているのか（例えば、財の配分において、いわゆる政策について「誰が、何を、いつ、どのように」という点）？
- ・こうした諸制度は市民の発言の質にどのような影響をあたえるのか？

すなわち、彼らの発言する能力と習慣を効果的に発展させるために、公共政策を進展させ実施する人びとに情報を集め、熟議し、公的に考え、選択肢を提供し、影響を及ぼすために市民を教育しているのか？ (Cameron, Hershberg y Sharpe, 2012a:15)

ラテンアメリカにおける参加型革新を分析・評価するカメロン等の視点は、ポピュリズム型の国家-社会関係を乗り越えるために極めて重要でもある。

## 2) 「ポスト自由主義」と「強い公共性」

新たな参加型実践は、たしかに民主制の実績と正統性を向上させ、説明責任と応答性を拡大し、一層活動的で積極的な市民権を促進するような可能性をもつ。それらは代表制型諸制度の危機が無視できないほどに拡がっているゆえに発展するかもしれない。しかも、こうした新た

な参加型の制度化された発言は、代表制型諸制度が強いところでさえ民主制の深化にとって貴重な特徴でもある。実際、代表機関はしばしばその活力を制度化された発言に依拠している。これまでの経験が示しているように、強力な代表制諸制度は、より直接的な市民参加の形態によって生み出されたエネルギーなしでは委縮するであろう。こうして、直接参加は、市民が消極的投票行動を超えた行動をとることで「ポスト自由主義」(Arditi, 2008)に貢献するであろう。しかし、それは「自由民主政の最良の伝統」の範囲でそのようにいえるのである (Cameron and Sharpe, 2012b: 234-235)。

<国家／市民社会の自由主義的分離を越えて：「強い公共性」>

「ポスト自由主義」は自由主義的市民権を超える参加型政治を意味する。他方、自由民主主義の主流の理論家は自由民主主義構造を定着させ、市場志向型経済政策を促進する市民社会モデルを前進させた (例えば、Diamond, 1999)。この理論の中心には国家と市民社会との鋭い区分があり、それにより市民社会は国家の行動をチェックし、国家に正統性を与えるように活動する。しかし、そこには意思決定の構造とプロセスへの民衆参加の配慮はない。あるとしても、その位置づけは極めて周辺的である。とはいえ、このモデルは1980年代のラテンアメリカにおける民主政への「移行」の案内役を務めた。

この地域の左派への旋回は、1998年のベネズエラにおけるチャベス大統領の選挙を契機に始まった。それ以降、「国家 - 市民社会」関係を再規定するために多くの左翼運動と諸政党によって経験が蓄積されてきた。繰り返しになるが、これはポルト・アレグレの参加型予算 (PB) やベネズエラの「地域住民委員会」のようなイニシアティブに見られる。これらの経験は、自由主義的諸原則の放棄やナンシー・フレイザーが「強い公共性 (strong publics)」(Fraser, 1993) と呼んだことに関連する。

グルーゲルとリジロツィは、フレイザーが「強い公共性」概念をラテンアメリカのポスト新自由主義に向けての戦略に適用する。すなわち、二つの間の鋭い分離に基づいた「国家 - 市民社会」関係の自由主義観念、言い換えれば、討議の実践が意見形成のみからなり、意思決定をも含まない公共性 (「弱い公共性 (weak publics)」) (Fraser, 1993:134) を「強い公共性」に転換する戦略である。これにより、フレイザーが意味したことは、市民社会の役割が単なる意見形成を超え、権威ある意思決定に向かうという点にある。そして、それは国家と市民社会の自由主義的分離を打ち破り、これら二つの領域における相互の重なり合いに置き換えられることを示唆した。このような経験は現れつつあるポスト・ネオリベラリズム理論の内部にも見られる。こうして、グルーゲルとリジロツィは、「市場との関係で国家を「再構築」しようとするポスト・ネオリベラル政策と社会的・経済的に排除されたコミュニティや諸集団のために、あるいはそれらによって国家を「飼い慣らす」そうとするポスト・ネオリベラル的企て」、この二つの間の有益な区別を提供している (Grugel and Riggirozzi, 2012)。

キャノンとカーバイは、こうした参加型諸施策が後者の方向に向かっていると考えている。同時に、彼らは次のような疑問を提起する。この方向がどの程度、国家の再建諸政策によって影響を受けているのか、あるいは受けていないのか、という疑問である。必要なことは、これらの国家と市民社会との関係がグローバル化のより広い文脈で検討されることである。なぜなら、経済成長に向けた資源輸出を頼りにする国家に特別なインセンティブ構造を押し付けるからである (Cannon and Kirby, 2012:189)。この課題は後に検討する。

### 3) 「代表制 vs. 参加」の二元論を超える多様性

< 制度化された発言の諸形態としての「直接民主制」 >

直接参加がとりうる一つの形態は「直接民主制」である。この用語は、しばしば人民投票型民主制を意味していた。カメロンとシャープは「直接民主制」についての議論を次のように発展させる (Cameron and Sharpe, 2012b:235-236)。マックス・ウエーバーのような理論家は、直接民主制が立法部や執行部における選出された代表者の権力を迂回するか、あるいは制限する潜在性を心配していた。この懸念を無視するのは現実的ではない。しかし、必ずしもすべての直接的で制度化された発言がそのような反自由主義的な影響を持つわけではない、と。

ここで、彼らが議論するのは、政治的平等の自由主義的理念をもち、代表的諸制度を強化し、自由主義的あるいは代表的民主制の最良な伝統を高める制度化された発言の諸形態である。参加型民主制は活動的な自治の経験を取り戻そうとしている。これを実現する一つの方法はレフェレンダムや人民投票を通してであり、それゆえ市民は代表者の介在なしに集団的に決定を行える。同時に、他方でそれは参政権の形式的平等を保持している。

人民投票型民主制は執行部により開始されたレフェレンダムを含んでおり、国民投票を活用する民主制の事例は世界中に多くある。立法者や有権者によって召集されたレフェレンダムは比較的珍しい (ウルグアイやスイスは例外)。ベネズエラにおける人民投票の利用は、選出された公務員を犠牲にして大統領権限を強化した。対照的に、ウルグアイでは多くのレフェレンダムが立法府から提案されている。それは大統領をチェックするために機能してきた。市民の請願から始まる市民的イニシアティブは、珍しい公的協議 (consultation) の形態である。それは有権者が強力な集合行動の問題を克服するために要請される。すなわち、民主主義や社会的正義、政府の効率性、これらへの彼らの影響が熱心に議論されている<sup>22)</sup>。

人民投票の危険が指摘されるが、それは支配者が立法府や法廷を回避し、立法府の仕事を掘り崩すような決定を行うために公衆に訴えることにより法の支配を妨げることである。これは直接民主制がしばしば反自由主義であると考えられる理由である。

人民投票 (= 国民投票) は直接的な制度化された発言の唯一の形態ではない。カメロンとシャープたちの研究 (Cameron, Hershberg y Sharpe, eds. 2012a) は、変化しやすい全国的な

投票に依拠しない新たな形態を考察してきた。これらは、コミュニティ協議会、参加型予算、あるいはインディオ自治のようなローカル・レベルでの小規模の熟議や集合行動を含んでいる。こうした参加形態がエリートに代替するのであれば、選挙における参加よりも民主主義のより現実的で効果的であることが実践的にも経験されている。

こうした直接参加型の経験を通じて、市民はアジェンダ設定、政策立案、公務員の説明責任を確保できる。カメロンとシャープたちはこうした制度化された直接的発言に関心を寄せている。なぜなら、それは市民が熟議や集合行動に必要な習慣や性向を獲得する可能性を持っているからである。

こうした制度化された直接的発言の最小限度の形態は、情報や理念、フィードバック、国民感情を政府の役人や官僚や立法者に提供する目的を持つ審議型メカニズムである。審議型メカニズムは、市民社会組織や非政府の専門家、影響力ある個人を正統化しエンパワーする。他方で、それらは単なるごまかしに終わり、市民の時間を浪費する危険性もある。しかし、参加者はこうした経験を評価する傾向にあり、それがよく企画されていれば、彼らは公共政策の結果を改善することができる。カメロンとシャープはこのように制度化された発言の諸形態としての「直接民主制」を考えている（Cameron and Sharpe, 2012b:237）。

#### <民主制の多様性>

カメロンとシャープたちの主張は、代表制を否定し敵視することではなく、その目的は「制度化された発言が民主主義の代替モデルに挿入されうる形態の多様性を考察すること」（Cameron, Hershberg y Sharpe, 2012c:35）にある。それゆえ、彼らは代表制と参加型制度との「融合」形態にも関心を示している。言いかえれば、それぞれの事例を「二次元の空間に位置づける」ことの重要性である。

例えば、チリはラテンアメリカで最も確固とした代表制民主主義の一つであるが、ベネズエラは最も参加型のレジームである。ボリビアとブラジルのような国は参加と代表制が結びついた最適のレジームの事例のようにいわれている。ブラジルの場合、その結びつきはスムーズに機能している。ボリビアではより緊張を孕んでいる。

ボリビアとブラジルは、参加が上から統制されず、代表制が尊重されているという意味でベネズエラやニカラグアと対照的である。2005年に大統領に就任し、2009年に再選されたエボ・モラレスは、ボリビアの政党制の崩壊を進め、サブナショナル・レベルで有力な野党と対立したが、同時に、2010年のレフェンダムで新憲法を採用することになった憲法改革過程に取り組んだ。この新たな憲法は部門レベルでの新たな立法諸制度を推進し、先住民の自律的な自治の創設を可能にした。前の章で論じたように、新たな憲法は代表制と参加と共同体の民主的諸概念のハイブリッドである（Cameron and Sharpe, 2012b: 243-244）。

結局、カメロンとシャープたちが強調するのは、多様な代表制と参加のモデルの考察、その

複雑で多様な連関の分析であろう。「民主主義の参加型の深化のみならず、その後退や挫折を説明」し、「ラテンアメリカにおける代表制に対する参加といった二元論を超えた議論」を深め、参加と代表制のメカニズムの動態の中で「民主的体制の多様性」を明確に描くことに貢献することであろう (Maxwell, Hershberg y Sharpe, 2012c:34)。

## 2. 自律的市民社会は存在するか

### 1) 参加型制度から見る「国家 - 市民社会」関係

ラテンアメリカにおける参加型制度構築の実験は、従来の国家と市民社会を概念的に区分するアプローチの再考を促している。市民社会アクターが参加型制度に関与し始めると、これまで主流であった「市民社会」認識の限界が主に二つの点で浮上している。

第一に、市民社会と国家との区分は、市民社会アクターの政治的編成への参入を説明できなかった (Dagnino, 2002)。市民社会と国家は重複し、一緒に行動しはじめ、市民社会と国家が出会う新しい理論を必要とした (Dagnino, Olvera, and Panfichi, 2006; Avritzer, 2003, 2004; Santos and Avritzer, 2006)。

第二に、多くの参加に関する文献のなかで、政党と政治社会は理論化されずにいる。それは、文献のエリート主義的性格あるいは社会運動理論の反システムの観念によっている (Alvarez, Dagnino, and Ecoabar, 1998)。とくに、ブラジルで労働者党 (PT) が参加型編成の導入を指導したとき、参加型諸形態の実施において、政党と市民社会との結びつきは重要な変数となった (Avrizer, 2009:7)。

エリート主義型民主主義論の危機が主張され、他方で、社会運動論 (Melucci, 1996; Touraine, 1988;1992; Tilly, 2000) に基づいた参加に関する諸理論も、市民社会論にその起源をもつ参加理論 (Cohen and Arato, 1992; Oxborn, 1995; Habermas, 1995) も、市民社会と政治社会との新たな関係形態を説明できないし、社会運動と国家との長期的な参加形態の制度的諸要素を把握できない、とアプリッツアーは指摘する。それゆえ、彼は「現れつつある参加諸形態の新理論が必要」であり、「参加型制度論」を提唱している (Avrizer, 2009:8; 詳しくは、松下, 2012, 第6章参照)。

### 2) 参加型民主主義は自律的空間か

参加型予算 (PB) に関する大部分の文献は、「熟議型」合意の枠組みに焦点を合わせている (Avritzer, 2005;2006; Gret and Sintomer, 2002; Navaro, 2003; Wampler and Avritzer, 2005)。この場合、市民社会はハーバーマスの公共圏の概念に従って国家や政党から自律しているものとして理想化されている (Habermas, 1990)。「熟議」の観念は「理想的発話状況」の場での合理的な思考の交換に基礎づけられている。それゆえ最善の議論が勝るであろう、と。

B. ルボット (Bernhard Leubolt) たちは、まずアプリツァーの影響力ある仕事に基づいて PB の解釈を検討し、「市民社会」と国家との関係の文脈で BP を分析する支配的アプローチを批判する。そのうえで、彼らはグラムシとジェソップに影響を受けた批判的国家理論による代替的アプローチを提供する。この見解では、国家と市民社会は自律的領域ではなく深く相互に絡み合っていると考えられている。市民社会における権力関係は国家に影響を与え、また国家権力によって影響を受ける。代表民主制においては、政党は中心的な要素であるが、かなり過小評価されている。にもかかわらず、国家は市民社会によって直接影響を受けるのではなく、「戦略的選別」により特徴づけられ、社会の特定の集団の行動をその他の集団よりも大事にする (Leubolt, et. al., 2012:79)。

そこでルボットたちは、まず、PB の政治的次元に関係する研究、すなわち、関連諸政党、とくに政府内の諸政党に関わる研究を論じる。「戦略的 - 関係的アプローチ」はブラジル労働者党 (PT) の役割をうまく理解するのに使われている。第二に、ふたつの事例が議論を例証するのに検討される。ポルト・アレグレの事例とサンパウロのオサスコ (Osasco) の事例である。これらの事例の検討は、支配的な「ハーバーマスの」アプローチに異議申し立てをしている。政党の役割に光を当てると、PB への参加者は政治社会の「周辺」に位置づけられ、国家諸アクターやそれぞれのヘゲモニー的プロジェクトをもつ政治運動との有機的結びつきをもっている (Leubolt, et. al., 2012:79)。最後に、参加型ガヴァナンスと政党の戦略的関わりや国家の民主化の試みは、こうした実践の解放型の潜在的な可能性をよりよく理解するために考慮される必要がある。彼らはこうした論点を主張する。

PB は自律的でよい市民社会という見方は、ここでグラムシ派の戦略的 - 関係的アプローチによって挑戦されている。ハーバーマスの「自由主義的観念」は、主に政治行為に向けての中心的メカニズムとしてコンセンサスに焦点を当てているが、グラムシは強制の役割や国家と市民社会の絡み合いに一層の強調を置く。政治は自分たちの観点を主張し、それぞれの目標に達するために様々な利益集団の絶えざる闘争と考えられている。グラムシは市民社会と政治社会の双方において制度を構築する政党の役割に特別な強調を与えている。グラムシ派の理論家は資本主義国家内におけるしばしば不均等な権力構造を承認している。とくに、資本や他の強力なアクターに有利に働く構造において。その結果としての不均等な権力関係を扱うために、「選別性」の観念がクラウス・オフエ (Offe, 1972) やボブ・ジェソップ (Jessop, 2007) により導入された。戦略的選別性は社会の様々なアクターへの国家制度のインパクトを抑止し可能にする (Leubolt, et. al., 2012:81)。

ルボットたちは、「特定の文脈における具体的な権力関係の決定的な重要性を示す政治社会と市民社会の間の詳細な分析」(Leubolt, et. al., 2012:93) が有益な出発点となると強調し、結論的に以下のように主張する。

「エンパワーされた参加型民主主義」や「強い公共性」のような概念を使うとき、政治過程のより現実的理解に達するために政治社会と市民社会の相互作用が考慮される必要がある。彼らは「政治社会と政党との特殊な関係」を検討することを主張する。それは「市民社会と政治社会との間に、また内部に形成された同盟や政治家の利害を反映している。PBは新たな自律的「公共圏」を創出したのではなく、ローカルな州の戦略的選別性を変えたのである。PBはローカルなレベルでの社会的・政治的諸勢力の相互関係にインパクトを与えた。それは人民諸階級の影響力を強化する傾向にある。ローカルな住民組織の活動家はローカルな意思決定過程への新たなアクセス・チャンネルを獲得した。しかしながら、PBは政党の活動家がさらなる政治領域を利用するユニークな機会となった。ローカルな諸制度の変化やローカルな州のそれぞれの戦略的選別性は政策形成にとって重要な帰結となった」(Leubolt, et.al., 2012:92)。

### 3) 党派性問題と参加型民主制

政党と党派性はしばしば参加型民主制の敵のように思われている。党派性は自治政府における参加型実験の制度化と有効性を掘り崩した場合もある。それは、参加型民主制の一定の提唱者たちが党派性を十把ひとからげに拒否するからである。しかし、政党は基本的な民主的機能を果たす。すなわち利益の集約、公務員の説明責任の確保、法律をめぐる交渉での統一性の創出、法案通過に必要な票の獲得などである。制度化された市民の発言に対する正しい方法を見いだすカギは、ポルト・アレグレの参加型予算が示すように、またブラジルの政策協議が示すように、非党派的熟議が自治体政府の選出された党官僚と共存し、協力する空間を創り出すことである(松下, 2012)。ブラジルの政策協議会は執行部によって召集され、立法府に組み込まれ、その勧告は法律となった。ポルト・アレグレの参加型予算はその市長のような選出された代表のイニシアティブなしには可能ではなかった。そして、市長の目標設定と位置づけは、参加へのイデオロギー的に関与し、一定の予算権限をその過程に移譲しようとする政党内に存在していた。結局、制度化された発言は極端な党派性によって浸食されうるが、すべてを政治化しようとしないうる政党とは十分に共存できるのである(Cameron and Sharpe, 2012b:240)。

## 3. 社会運動と国家

### 1) 社会運動はどのように国家と関わるのか

ラテンアメリカにおける新しい「新左派」政権の誕生やその性格と展開、さらにその行方を検討するには多様な社会運動との複雑な関係を分析することが不可欠である。これまでもこの地域では実に様々な社会運動が出現し、衰退してきた長い歴史的経験を有している。しかし、グローバル化と新自由主義の歴史的コンテクストにおいて、この地域の社会運動は、国家に対する新たな社会的挑戦を突きつけ、同時に民主的実践を継続する実践では一定の責任を担保す

ることになった。

こうした背景には、「北」の社会運動とは形態と内容を異にするラテンアメリカを含めグローバル・サウスの社会運動がある。この相違についてガベンタは以下のようにまとめている（Gaventa, 2010）。

第1に、グローバルな経済秩序が南の国家間での権力関係を形成するのみならず、国家内の権力関係をも構築する。したがって、グローバル・サウス諸国の貧しい人々の資源へのアクセスは、ナショナルとグローバルな諸要素によって常に調整されている。

第2の相違は、グローバル・サウスの動員と社会運動は国家と民衆との主要な連携形態となってきた。多くの北の国々とは対照的に、そこでは動員と社会運動は市民権の達成にとって重要な手段となってきた。新しい民主政の文脈では、参加への制度的チャンネルが弱く、また非応答的であったが、社会運動は国家から諸権利を実現し、より平等で持続的な開発形態に向けて戦うための基本的に重要な手段でありうる。「市民権を強力に支える社会運動なしには、市民権は脆弱な参加形態に切り詰められる危険にさらされる」であろう。

第3の相違は、多くの社会動員は一般的な人権よりも、社会・経済的諸権利を志向する傾向がある。「グローバル・サウスでのグラスルーツ運動のダイナミズムは、広範な社会的・経済的不平等の問題と複雑に結びついている。それはグローバルなシステムと連携し、彼らの目的を達成するにはローカルなことを超える戦略と戦術を必要」とする。

今日、長期の民主化闘争の歴史を通じて民主的空間を達成してきた国も少なくない。その民主的空間は脆弱であったとしても、社会運動の焦点は広範囲な不平等な形態に異議申し立てをするためこの新たな空間を如何に利用するのかに変わった。それは「単なる政治的・市民的諸権利に留まらない社会的・経済的諸権利の達成や資源の管理、より包括的で応答的なガヴァナンスの統制」といった基本的関心を反映している（Gaventa, 2010: x iii）。

こうしたガベンタによるグローバル・サウスにおける社会運動の位置づけと特徴は、ラテンアメリカに適切に当てはまる。21世紀の最初の10年間における左翼の劇的な権力掌握の前に、多くの学者や活動家は社会運動の力を社会正義と民主的諸権利の拡大の背後にある主要なエンジンと考えた。だが、選挙を通じて権力を掌握した左派政権と社会運動との関係は各政権により複雑かつ多様である。

ガリー・プレボスト等は、左翼政府と社会運動との相互作用についての学術的な研究の相対的欠如に言及し、この関係について以下のような問題を分析する必要性を提起している（Prevost, Campos, and Vanden, 2012:14）。

- ・社会運動は新しい政府に圧力を行使できるか、あるいは、彼らからの抵抗の猶予を新政府に与えるのか？
- ・彼らは独立して行動するのか、あるいは、政府の政策のチェアーリーダーになるのか？

- ・進歩的政府は政策に関して相談すべきパートナーとして社会運動を見ているのか、あるいは、取り込まれるべき政治勢力としてか、また少し距離を保った反対者として見ているのか？
- ・政府は運動の活動家を重要な指導部に入れるのか、あるいは、それまでの政府と同様に抑圧的機構により挑戦に対応するのか？
- ・最後に、社会運動や左翼政党は共有する社会正義の目標を他者の支持や圧力、構造なしに達成できるか？

プレポスト等のこうした問題意識は、新しい「左派政権」の評価、とりわけエクアドルのコレア政権の評価に関わって重要になる。マルク・ベッカーは、コレアをベネズエラのチャベスやボリビアのモラレスとともに急進的左翼政府のトライアドの一角に含ませる議論への批判に同意する。なぜなら、エクアドルの事例のユニークさを見失わないためにもとくにより深く注意深い研究の必要性を強調する (Becker, 2013:46)。

コレアの選挙勝利は1990年代のネオリベリズムの時代の長い社会的・人民的闘争の頂点であった。もしこれらの圧力がなければ、コレアは大統領になれなかった。モラレスと同様(同じくN. キルチネルも)、コレアは権力に対する反システムの抵抗に便乗した。モラレスが強力なボトムアップ型の影響と絶えざる交渉を行わなければならないのとは異なり、コレアは、「上からの革命、執行部門によって創設された革命」(Montúfar, 2013)を進めている。コレア政権は参加型というよりテクノクラートの的である。そして、彼の祖国同盟 (Alianza País) は社会部門との有機的連携に欠けている。コレアは民主主義を社会的正義の提供として実質的意味で理解している (de la Torre and Arnson, 2013: 28)。

モントゥファ (Montúfar) が指摘するように、コレアは政府の他の諸部門の独立を侵食し、執行部門に権力を集中し、ますます政治領域を人格化している。もしモラレスの統治スタイルが強力な参加型要素を含んでいるとすれば、コレアのスタイルはトップダウン型であり、チャベスは中間であった (de la Torre and Arnson, 2013: 30)。

いずれにしても、3カ国のそれぞれの政府と社会運動組織との複雑な関係には注意深い検討が要求される。スティーブ・エルナーも認識しているように、それぞれの新しい「左派政権」の「多様性と複雑性は歴史的背景を特徴づけている」(Ellner, 2012:12) ののである。

## 2) 左派政権と社会運動が抱える課題

### 〈エクアドル〉

エクアドルの社会運動は急進的な左派組織の努力の長い歴史から現れてきた。コレア政権の誕生にはこの社会運動と関わりがあったが、同時に両者は対立と矛盾を含んでいることは本稿の第IV章で論じた。今日、コレアは伝統的な保守的オリガキーからのその権力を脅かされているが、同時にコレア政権に対する重大な挑戦が社会運動左派からも生まれている。

エクアドルの事例が示していることは、大衆的な社会運動の熱狂とエネルギーなしに左翼政党は伝統的なオリガキーに埋め込まれた経済的・政治的利害に反対する牽引力を確保できない。しかし、社会運動は政府構造に対する支配を確保することなしに彼らの意欲的な変革の課題を達成できない。それゆえ、左翼の動きはプラグマティックな段階を必要とし、それは一貫して矛盾に満ち、不可避的に対立に導く。活動家たちは彼らの運動の権力をカリスマ的大統領に従属させる見解を疑っている（Becker, 2013:45）。

エクアドルにおける最も組織された戦闘的な社会運動の一つであるエクアドル先住民連合（Confederación de Nacionalidades Indígenas de Ecuador :CONAIE）議長、ウンベルト・チョランゴ（Humberto Cholango）は次のようにコレアを批判する。

コレアは社会的抵抗を犯罪視し、多国籍鉱山会社や石油企業の否定的影響を直接受けるコミュニティの事前の同意なしにその操業開始を許可する鉱業政策を進めている。さらに、チョランゴはコレアの農業革命、水の再配分政策、多民族国家構築政策の点でも批判している。コレアの新自由主義批判はそのレトリックとは対照的に、政府は基本的にこれまでの政府の経済的・社会的政策を継続してきた、とチョランゴは告発した（Becker, 2013:44）。

コレアは確かに保守的反対派、ビジネス界、米国政府に挑戦してきた。同時に、社会運動左派とも対立してきた。コレアが教師内での全国教員連合（Unión Nacional de Educadores: UNE）のヘゲモニーを握り崩す新たな評価制度を提案したとき、この組織は反対に回った。そして、全国農民・先住民・黒人組織連合（Confederación Nacional de Organizaciones Campesinas, Indígenas y Negras :FENOCIN）は、農業政策と水政策に関して政府との距離をとった。それに対応して、コレアはエクアドル先住民同盟（Federación Ecuatoriana de Indios: FEI）のような弱小な周縁的組織に向きを変え、あるいは彼の統治への社会運動の支持の幻想を構築するために新たなにわか仕立ての組織を設立した（Becker, 2013:50）。

ベッカーは、チャベスやモラレスとの比較で社会運動に対するコレアの姿勢を明らかにしている。

「チャベスは草の根組織の発展を鼓舞するために政府機関を活用した。ボリビアは戦闘的な社会組織化の歴史を持っており、モラレスは彼の政府を固めるためにこの伝統に乗った。反対に、コレアは既存の組織的努力を切り下げ、草の根の社会運動のための新たな空間を創出すべく彼の執行権力を使わなかった。彼はベネズエラのボリバル革命の発展における様々な段階を特徴づけてきたボリバル・サークルや地域住民委員会のような構造を構築しなかった。彼は草の根組織をエンパワーせず、資金をローカル・レベルに向けなかった。その結果、彼の市民革命は民衆の反乱ではなかった」（Becker, 2013:51）

こうしたコレアの社会運動、とくに社会運動左派に対する否定的な政治的姿勢を含めて、それでは彼らは政府に如何に対応すべきか。この点に関して、エミール・サデルは政治的右派

や伝統的なオリガキー、金融資本を利することなく彼らが政府に圧力を賭けるよう注意を促している。

サデルへの社会運動の忠告の要点は次の点にある。すなわち、コリア政権の穏健で矛盾した諸政策にもかかわらず、この政権はそれ以前の政府と同じではない。コリア政権の積極的で前進的な側面を承認し、この政権の進歩的部分と同盟を強化し、金融資本の遺産への攻撃を集中することを力説する。サデルは草の根的な抵抗の重要性を承認するが、権力構造への関与の必要をも指摘する。もし社会運動が自律的空間に後退すると、彼らは孤立し、自分たちを周辺化することになる、とも主張している (Emir Sader, 2011:104)。

結局、「社会運動の活動家にとっての課題は、自分自身の階級的利益と政治的課題を掘り崩すことなく、より応答的になるよう政府に圧力をかける方法を学ぶこと」(Becker, 2013:45)である。

コリアと社会運動の相互作用はかなり大幅に揺れ動いている。そこにおいて、民衆の基盤の社会的亀裂に対応する戦略とイデオロギーが対立に至った。その結果、現れた複雑な状況が左翼にとって大きな挑戦となった。社会運動の恒常的な困難は、右派への共通の敵を強化することなしに、左派がコリアに異議を申し立てることである。彼らの脆弱で妥協的な立場から、社会運動活動家は周辺の共同体を搾取し抑圧する構造の変革を推進できないポピュリスト型ガヴァナンス (人格的リーダーシップ、組織的弱さ、イデオロギー的曖昧さ) への服従を問題にしている。この視点から、社会運動はより公正で平等な社会構築において果たすべき基軸的役割を今でも持っている (Becker, 2013:59)。

#### 〈ボリビア〉

ボリビアは政治的移行の複雑な瞬間を送っている。すなわち、その目標は民主主義の厳格な代表制モデルから「参加型、代表制型、共同体的」モデルに向うことである。

MAS とその同盟者は公的問題へのそれまで排除されていた諸部門の直接参加を促進してきた。同時に、先住民集団の伝統的諸慣行を公式な制度構造に統合し、不平等と極貧の削減に向けた開発の道を推進してきた。

ボリビアは政治史における新たな時代に入った。その主要な革新は支配同盟における先住民-農民の人民部門の主導的役割である (García Linera, 2010:38)。同時に、この同盟の異質性は社会諸部門内部の多様性と潜在的緊張を管理する点で厳しい課題を引き起こしてきた (Fontana, 2013:27)。

ボリビアは新自由主義政策に反対する民衆蜂起を経験した。ボリビアの水戦争 (2000年) とガス戦争 (2003年) は調整政策の不満の表現である。とくに公共サービスや合衆国へ輸出するための炭化水素の民営化、そして組織された社会運動における民族主義的感情の肯定。ガス戦争は資源ナショナリズムのもとでの蜂起の縮図である。国家の諸勢力との頻繁な対立後、大統領

領ゴンサロ・サンチェス・デ・ロザダ（Gonzalo Sánchez de Lozada）は政府から追い出された。

最終的に、この運動は天然資源に対するローカル・ガバナンスとインディヘナ住民からの長期的な歴史的要求との対立をも表面化した。この対立はモラレス政府の間続いた（Rosales, 2013:1446）。

2003年のガス戦争は社会運動内の強力な民族主義的動員であることを明らかにしたが、それはまたエボ・モラレス政権が推進するサブナショナルな自治要求をめぐる緊張の拡大でもあることを明らかにした。これらの緊張は過去数年間に資源ナショナリズム政策を導いてきた。他方で、同時に、ローカルなアクターと抽出産業と政府自体の間の継続的対立に国家が介入することを余儀なくしている。外国直接投資（FDI）へのボリビアの従属はその長い歴史の中で浸透してきた。そして、とくに鉱山と炭化水素部門で重要である。1990年代と2000年代初期の民族主義的言説と動員は、選挙の得票を通じてモラレスの権力掌握を促進しただけでなく、天然資源抽出に対する国家統制の拡大に向けた彼の初期の姿勢をも推進した。にもかかわらず、ナショナルおよびリージョナルな公共圏において、ボリビアの植民地遺産の文脈に置かれた民族的言説は決して天然資源の管理に限定されない（Rosales, 2013:1449）。

#### <分権化改革と社会運動>

新しい1994年ボリビア憲法はとくに重要であった。それは公式にボリビア人民の多民族的、多文化的構成を承認し、先住民の特別な権利を保護し保証した。

他の重要な民主的改革は、1994年民衆参加法（*Ley de Participación Popular*, LPP）、1995年行政分権化法、1996年選挙法、2001年国民対話法、そして2004年市民アソシエーション・先住民法である。分権化諸改革はローカル政府とリージョナル政府を強化し、大きな財源を提供し、直接的財政管理と自己統治を数百の新たな自治体や先住民共同体に与えた（Morales, 2012:53）。

より広範な民衆参加も1994年と2004年の間の立法によって促進され、かなり拡充された。民衆参加法は領域基盤組織化（*Organizaciones Territoriales de Base*, OTB）への法的承認を拡大した。OTBは農民共同体、先住民共同体、そして地域委員会・組織を代表していた。国民対話法は最終的には先住民自治体を形成し、彼らに貧困削減のための追加的財源を提供した。

2004年改革（市民アソシエーション・先住民法）により、市民社会組織やOTBや社会運動は政党から独立して自分たちの候補者を立てることが許された。この法律は社会運動のためのジェンダー割り当てを義務付けた（候補者の50%は女性であった）。

結局、多くの市民組織、社会運動、女性グループ、先住民グループは2004年自治体選挙で初めて候補者を立てた。さらに、2005年の2004年改革拡充はその年の12月、第1回の9県の知事選あるいは地域知事の直接の選出と選挙を与えた。さらにローカルとリージョナルなアクターと運動のための大きな役割にむけ政治制度を拡げた。以前には、大統領は知事を任命した

(Morales, 2012:54)。

こうして、分権化と参加の改革は社会運動の民主主義発展に決定的であった。財源を提供することで、また政治とガバナンスにおけるローカルな先住民の市民参加、組織化、経験の拡大により諸改革は、社会運動の成長と効果を鼓舞するより包括的で魅力的な政治文化を促進した。すぐさま、これらの民衆運動は先住民やその他の周辺の市民をエンパワーし、幾つかの戦線で——地方事務所、中央議会、街頭で——政府に挑戦した。先例のない多数の非伝統的な候補者が立候補し、この時期、ローカルならびにナショナルな公職に選出された。300以上の新しい自治体が新たに選出された知事により形成された。その多くは共同体や先住民リーダーから引き抜かれた。同時に、市民社会アクター——先住民組織、地区委員会、労働者と農民のアソシエーション、ココの葉栽培者連合、主婦と女性グループ——は独立して、また同盟して示威運動を組織した。そして彼らの要求と不平をともして直接、政策形成者と対立した。かなりの部分、分権化改革のおかげで、これらの密接に連結した連帯グループは、政府による水の民営化や天然ガス資源の商業化に反対し、ほぼ自然発生的に生まれた全国規模の激しい社会的抵抗運動を支持して数千の支持者や活動家を積極的動員する点で効果的に配置された (Morales, 2012:54-55)。

#### <政府と社会運動との連携を解明>

モラレスの歴史的勝利 (2005年12月) は多くの点でアンデス国民の社会運動にとって予想外の勝利を示した。モラレスは、階級的、人種的、民族的障害に打ち勝ったのみならず、彼はボリビアの最初の社会運動出身の大統領でもあった。数百のローカル、リージョナル、ナショナルなアソシエーションや運動への民衆参加は、民主主義を甦らせ市民社会を活性化した。社会運動型民主主義は大衆リーダーやコミュニティ代表——その多くはモラレス同様に先住民と貧農を基盤にしている——が選出され、またアンデス国家の権力、健康、ガバナンスにとっての強固に固められたセンターに挑戦する先例のない機会を提供した (Morales, 2012:49)。

多様な社会運動を通じて、貧民や貧農やココ栽培者、先住民の民衆や女性から引く抜かれた非伝統的な政治アクターは、特定の、しばしば限定的な目標を達成するための活動家ネットワークと抵抗キャンペーンを組織した。しかし、やがてボリビアの普通の人々によるこれらの運動は、経済的新自由主義、手におえないグローバル化、軍事化したアンデスのドラッグ戦争、慢性的な環境侵害と人権侵害、これらを取り巻く不人気で不正な政府の諸政策に反対して広範な集合的闘争に参加した。この過程で、大衆的社会運動は市民権の意味を拡大し、ナショナル・アイデンティティの基盤と内容を定義し直し、文化と権力との緊密な関係をボリビアの多民族的・多文化的な国家と社会に中で構築しようとした (Morales, 2012:49)。

ここで考えるべき基本的問題は、ボリビアの新しい社会運動、特に急進的な「新左翼」と先住民運動が如何に、どの程度、進歩的モラレス政府の憲法的・社会経済的諸改革を推進し、形

成し、時には異議申し立てをしてきたか、この点にある。ボリビアの最初の社会運動出身の大統領として、モラレスは重要な影響を生んできたのか？彼はその民衆運動の基盤によって拘束され、その急進的な改良主義的要求に応答的であったのか？あるいは、彼の先住民的、ポピュリスト的、社会主義的レトリックと系譜にもかかわらず、モラレス大統領は社会運動を犠牲にして実際は穏健で懐柔的なアジェンダに従ってきたのか？そして、モラレス—MAS 政府は内外の強力な経済的諸勢力に便宜をはかり、真の「社会主義的革命的」変革を危うくしつつあるのか？（Morales, 2012:50）

典型的に、ボリビアにとっては、これらの基本的問題は、問いを発する人と時期により大きく変わる。彼の新しい社会運動の基盤の支持で、モラレス（と MAS 政党）はそれまでよりも大幅な得票で 2009 年 10 月に再選された。しかし、第二期の半ばで、その勝利を祝う幸福感は消えた。2009 年、有権者に承認された新たな改革的憲法やモラレス政府による進歩的・親先住民的諸立法の急速な実施にも変わらず、ボリビアは再び食糧と燃料の不足、激しい街頭の抵抗、いらだたしい道路封鎖によって混乱させられた。これは当時、モラレスの保守的反対派ではなく、政府と対立する新しい社会運動の急進的で強力な部分によって扇動されたのである（Morales, 2012:50）。

#### <政府と社会運動との軋轢>

2009 年初め、農業の土地保有を制限する新憲法 398 条の最終的な可決は低地先住民共同体に青信号を出した。これらの共同体の幾つかは攻撃的に土地改革と天然資源への自治を促進するよう動いた。初めから、モラレス大統領は高まる先住民の期待を宥めようとし、その年の 3 月に大きく宣伝された象徴的なセレモニーにおいて、大土地所有から低地グアラニ農民へ接収された土地を配分した。にもかかわらず、不満をためた農民 - 先住民を基盤とした諸組織——CSUTCB, CIOB, 「土地なし運動」(MST), そして Tierra y Territorio 運動——は、2010 年、土地と自治を求める全国的な行進を展開して圧力をかけた。

こうしてモラレスの異なる支持者の競合的利害と土地改革の緩やかなペースや先住民の土地の権利に対する抵抗は、モラレス政権第二期の間、政府と社会運動との軋轢の源泉のままであった。社会運動もますます内部では不一致を示していた。高地コカ栽培農民グループや入植者の諸要求は、保護された領域と自然保護区をめぐるローカルな先住民と衝突した。生物多様性の習慣と熱帯低地の豊かな天然資源をめぐる闘争は、モラレスの高地を基盤にした中央政府の政治や財政的必要性に対する東部先住民共同体を競わせた（Morales, 2012:64）。

## 4. 新たな従属的制約：グローバルな資本と市場

### 1) ポスト新自由主義への障害

多くの新たな左派政府、とくにベネズエラ、ボリビア、エクアドルは、底辺の民衆を勇気づ

け包摂する方法として天然資源を活用する政策を実施し、それを政権の中心的政策に位置づけた。新自由主義的政策を拒否し、彼らに社会政策を提供するそれぞれの国家の能力は、世界市場における商品価格が高価格で推移していた状況の下で、天然資源の採掘からの収入を確保することに結びついていた。それゆえ、この天然資源への期待と依存は、広範な社会・政治的プロジェクトを構想する全般的な政策の中核に置かれることに成った。これらの諸政府は天然資源の採掘し、その輸出から得られた利益を社会化する政策に従ってきたのであった（表、参照）。

一次産品輸出（全輸出額に対する割合）

	2004	2006	2008	2011
アルゼンチン	71.2	68.2	69.1	68.3
ボリビア	86.7	89.8	92.8	95.5
ブラジル	47.0	49.5	55.4	66.2
チリ	86.8	89.0	88.0	89.2
コロンビア	62.9	64.4	68.5	82.5
エクアドル	90.7	90.4	91.3	92.0
メキシコ	20.2	24.3	27.1	29.3
ペルー	83.1	88.0	86.6	89.3
ベネズエラ	86.9	89.6	92.3	95.5
ラテンアメリカ	46.2	51.3	56.7	60.9

（出典）ECLAC, 2012.

例えば、エクアドルでは、2008 憲法が石油、鉱山、輸送、テレコミュニケーションなど、従来の諸政府が民営化していた経済部門の政府統制を再確認している。コリアは採鉱に関わる諸活動が経済を刺激し、雇用を創出し、社会プログラムへの融資を提供し、またこれらすべてが否定的な環境問題を引き起こすことなく達成されると考えた。彼は環境と労働者の権利を保護する強い国家統制を通じて、社会的に責任をもつ大規模な鉱業活動に支持を与えた（Becker, 2013:53）。

こうした資源輸出収入への依存は、国家の優先事項がグローバルな経済環境に左右されることを意味する。実際、ボリビア、エクアドル、アルゼンチン、チリにおいて、国家による市民社会への対応が、資本とグローバル市場の要請によって導かれ形成されている。諸政府は近年のグローバルな商品ブームから利益を得ようとした。しかし、それぞれの事例で、貧困削減が優先項目であるとはいえ、どの国も基本的な再分配の変更に着手していない。社会政策の約束や社会的正義の諸措置は、商品輸出からの収入に多かれ少なかれ依存する方向で政府を制約している。これはナショナルな政治条件をも制約する。多くの場合、それは採掘産業活動に関連するローカル・レベルにおいて軋轢を引き起こすことになった。こうして、貧困削減戦略や民主主義を深化させる政府の諸施策は、政府による民主主義を制約する方向で妥協させられた。

ラテンアメリカ「新左翼」はポピュリズムを超えられるか？（下）（松下）

その結果、「統合へのポスト・ネオリベラル願望は、国家権力を再構築するポスト・ネオリベラル諸政策と衝突」した（Cannon and Kirby, 2012:199）。

この点と関連して、アティリオ・ボロン（A. Boron）は三つの問題を提示している。第一に、市場権力の拡大、そして市場に不利益になる政策を導入する政府に対する彼らの「恐喝能力」（例えば、資本逃避や投資ストライキなど）である。

第二に、帝国主義の持続力である。それは、世界銀行やIMFのような国際金融組織（IFIs）によるコンディショナリティを通じて、あるいは「ドラッグ戦争」や二国間援助に関連して、合衆国からの政治的な直接要請を通じて行われる。これらの圧力は、ほぼ全面的にマスメディアを統制する大資本によるイデオロギー操作により監視されている（Boron, 2008:247）。

第三に、この数十年に及ぶ民主主義の切り下げは、国家の「社会生活への介入能力」（Boron, 2008:247）を弱めた。さらに、ラテンアメリカにおける国家の歴史的脆弱性によっても悪化させられた（Panizza, 2009:226）。加えて、前述のように、多くのラテンアメリカ左派政府は開発主義モデルを追求してきた。それは資源採掘に特権を与え、社会的要求を充足するのに使われるべき諸資源からの収入にも拘らず、多くの社会運動（とくに、環境保護運動家やインディヘナ集団）と対立を引き起こした（Dangl, 2010）。

これらすべての要因は、グローバル化時代にその権力を強化した外部の経済的・政治的諸勢力によるナショナルな空間への浸透から引き起こされている。これらの諸要素は、その約束を伝える新たな左翼政府のマヌーバの余地を厳しく制約し、彼らを政権につけた多くの社会運動のなかに幻滅と離反を引き起こした。さらに、それらの諸勢力は、国家と市場への影響力を強化した。そのため、ポスト新自由主義へのプロジェクトを実現する左翼の企ては、それ自身の社会的支持基盤の縮小を生んでいる（Cannon and Kirby, 2012:192）。次に、資源採掘とその輸出への依存の問題性を若干、包括的に検討する。

## 2) 資源輸出の問題性

<反自由主義と資源ナショナリズムの接合>

ラテンアメリカの左派への旋回とその制約・限界を天然資源に対する国家所有と結びつける解釈は少なくない（Rosales, 2013; Veltmeyer and Petras, eds., 2014）。ベネズエラ、ボリビア、エクアドルにおける最近の左翼運動のプロセスは、新自由主義改革の失敗に関わっている。資源採掘は多くの成果を彼らに保証した。だが同時に、差し迫った難題をも彼らに突きつけた。

この点で、メルトメイアーとペトラスは以下のように議論を展開する。世界資本主義のラテンアメリカ・ペリフェリーにおける開発の政治経済学は、今日、経済学者が「一次産品依存『primization』」（経済における一次産品部門の優位に主導された経済成長への依存）および「採掘主義『extractivism』」<sup>23)</sup>（「土地獲得への大規模投資の過程で採掘された化石燃料とバイオ燃

料, 鉱物とアグロ・フーズ生産物のような天然資源の採掘に基づく経済発展)], あるいは, 批判的農業経済の言説である「土地の強奪」とよぶ見地から見ると上手く説明できる, と (Veltmeyer and Petras, 2014:222)。

ラテンアメリカ経済の「一次産品依存の復活 'reprimarization」は, 新自由主義型グローバル化の新たな世界秩序によって押し付けられた「構造改革」のもとで1990年代に始まった。これらの諸改革は, 新自由主義であり, ポスト新自由主義であり, この地域の諸政府が輸出を拡大し, 彼らの対外累積債務支払いに必要な外貨と追加的財政収入を生み出す必要性に対応していた。また, ポスト・ワシントン・コンセンサス (PWC) に基盤を置くより包括的な開発形態への進展をするために, 天然資源での比較優位を活用することを可能にした。この改革が開始された当時, 一次産品の比較的低価格のために, この戦略はスムーズには起こらなかったが, 諸改革は外国投資のための地域の採掘産業を開放することになった (Veltmeyer and Petras, 2014:36)。

ラテンアメリカの21世紀は, 反新自由主義的抵抗とナショナルな政治における左翼への転回で始まったが, 彼らの社会的基盤の要求を満たすための新しい戦略となったのが「採掘主義 (extractivism)」であった。反自由主義的感情と一次産品ブームの一致は, 資源採掘成長戦略に基づいたポスト新自由主義政策に導いた (Veltmeyer and Petras, 2014:36-37)。

グディナス (Gudynas) は, 資源採掘に向けた進歩的政府の渴望を「新しい採掘主義 (New Extractivism)」<sup>24)</sup> と呼ぶことを提唱し, 次のようにその論理を主張した。すなわち, 資源採掘を通じてレントが再配分に使われる。この場合, 国家がより積極的であるだけでなく, エクアドルやベネズエラの事例のように, それは主要なアクターである。外国企業がこの地域で採掘活動に既に参加しているときですら, 左翼が政権を握る国では, 外国企業は高いロイヤリティを支払い, ある場合には国家所有企業との合弁事業に参加する。にもかかわらず, 多くの社会的要求が満たされるにつれ新たなダイナミズムが起こり, 新たな要求が生まれ, 一層の採掘活動が必要になる。こうして, 資源輸出による収入を通じて, 政府は「正当化」され, これらの活動が一層大幅な社会福祉を促進するにつれ, 彼らは採掘活動を正当化する。ここでの議論の中心は, 採掘によるレントの配分である (Rosales, 2013:1454)。

<「新しい採掘主義 (New Extractivism)」と開発の落とし穴>

これまでの経験が示すように, 多くの天然資源を持つことで, 国家は重大な開発の落とし穴に直面する。A. ロサーレスはこの点を指摘する。この地域を専門とする政治学者や政治経済学者は, 地域の左翼的旋回における資源ナショナリズムの諸問題に十分な関心を払ってこなかった。むしろ, 批判的な地理学者や政治的なエコロジストが採掘産業やその政治経済学的結果に分析的関心の中心をおいてきた。

彼らは, ローカル・コミュニティと政府の国家的プロジェクト, TNC, その環境の間の結び

つきにも新たな光を当てていた。なぜなら、「採掘産業は同時に信じられない富と破壊を創り出す」からである。それゆえ、批判的論者は資源採掘問題をめぐるこれらの政治的プロジェクトの間のある種の「収束」を提案する（Rosales, 2013:1452-53）。

この「モデル」は短期間で貧困削減や不平等の解消をもたらした。しかし、この「成功」にもかかわらず、こうした成果の持続力は疑問が残っている。ベネズエラの事例は、民衆の管理と国家の説明責任とを結びつけることがなければ、有効で効果的に社会投資を漸進的に拡大できないことを示している。さらに、社会経済的包摂と「民衆」参加の問題は、レントの国家的配分メカニズムへの周辺住民の包摂を超えた民主的諸原則に関するさらなる工夫を必要としている。ここに、これらの社会的実験がどの程度現実的なオルタナティブかは重大な論争点になる（Rosales, 2013:1454）。

他方で、メルトマイヤーとペトラスは、「新しい採掘主義 new extractivism」が「思いがけない経済的機會よりも呪いである」と主張し、その理由を次のように要約する（Veltmeyer and Petras, 2014b: 228-232）。

第一に、最も成功した開発の経路は、明らかに天然資源の採掘や一次産品輸出ではなく、資本主義発展過程や経済的・社会的インフラと人的資源開発への投資に基づく工業化戦略で生み出される開発である。この視点から、工業化なしに（生産力の、そして社会的諸条件の改善の意味で）如何なる開発もありえない。

第二に、資源の豊富な諸国の一次産品輸出への依存は、交易条件の悪化に向かう長期的傾向に直面する。これはプレビッシュやECLACが明らかにしたように、システムの中核の発展と「周辺」の「低開発」や貧困に導く（Prebish, 1950）。遅かれ早かれ交易条件は天然資源や一次産品の輸出国に悪くなる。

第三に、採掘主義と一次産品化は、ブームと破産のサイクルを意味する。そこでは価格は必然的に上下し、政策形成者が統制・管理できない諸条件を経済に押し付ける。

第四に、「資源の呪縛」の問題がある。それは、一次産品輸出が経済の他部門における製品輸出に対する為替相場に否定的な影響をもつということである。一例として、最近のブラジル政府が直面したジレンマがある。2010年まで、ブラジルは工業に焦点を合わせたFDIの主要な行先であった。そして、ブラジルは（中国、インド、ロシアとともに）、成長するグローバルな中間階級の要求を媒介にして国際貿易を推進していた「新興市場」の一つであった。しかし、最近、FDIも政府も次第に天然資源採掘に向って来た。過去5年間、ブラジルはコロンビアやチリとともに、ラテンアメリカにおいて資源を求めたFDI——化石燃料、バイオ燃料、鉱物、ならびにアグロ・フーズ生産物への大規模な投資——の主要な行先に代わった。その結果は経済成長率のかなりの減少であった。

「資源の呪い」の説明として展開された第五の考えは、天然資源採掘に基づく発展は必然的

にグローバル市場に結びついた飛び地に位置づけられる、この点である。

第六に、採掘資本は資本の高い有機的構成と生産過程における労働力の活用に対する極めて低い傾向に特徴づけられる。その結果として、採掘部門における労働力は社会的生産の極端に小さなシェアを割り当てられている。輸出ブームの4年間の後、フォーマル部門における実質賃金の価格指数は0.5%も少なくなったとECLACは報じている（ECLAC: 2007）。

こうして、天然資源採掘と一次産品輸出に基づいた経済モデルは、南米の新たな規制型ポスト新自由主義体制の下でさえ「開発の罠」である、これがメルトメイアとペトラスの基本的議論である。これは主に資本と国家との従属関係が理由であり、たとえ富をもたらすとしても、このモデルが大規模な外国投資と極端に破壊的である採掘資本の活動への依存のためである（Veltmeyer and Petras, 2014b:232）。

#### <政治的影響>

社会的・経済的悪影響に関しては前の章で述べてきた。ここでは政治的影響に絞って述べる。

新自由主義的であれ、ポスト新自由主義的であれ、国家の関心は資源を採掘するために外国企業の能力を最大化し、グローバル市場にそれを売却する明らかである。そのことは、彼らの活動によって直接影響を被る住民や共同体の側よりも資本の側に政府を置く。他方、資源帝国主義に抵抗する諸勢力は、資源採掘による環境へのダメージ、ローカルな住民と鉱山労働者自身の健康と生活への影響に対して抵抗するため形成された新しい社会運動を含んでいる（Veltmeyer and Petras, 2014a:41-42）。

こうして、メルトメイアとペトラスは、「新しい採掘主義」のコストが社会経済的、環境的なものとどまらず、政治的コストも伴うことを主張する。

「あらゆる場合に、執行権力は選挙や立法府に諮ることなく諸決定を行う。国家と多国籍企業との合意は、民主的過程を侵食し、市民の抵抗に対する暴力的な抑圧を通じて維持・強制される。これらの政治的コストはFDIへの政府の継続的従属から生まれる。それは、採掘過程で生じる紛争において、これらの政府が、民族主義的方向性やポスト新自由主義的な進歩的な政策スタンスを持っている場合でも、共同体や社会運動に反対する資本に同調する明らかな傾向を説明している」（Veltmeyer and Petras, 2014b:234）。

カノンとカーバイは、鉱山活動がローカルなレベルでの民衆の間に生み出す利害の不一致、分裂に注目する。権力を握った新左翼政府は再調整政策、「再課税」や鉱山採掘の再国有化の諸政策を採用した。そして、それは社会プログラムの資金を賄うために収入を高めることを可能にした。しかし、これは対立を引き起こした。ナショナルなレベルでは、この地域の多くの国で反対グループが反乱を引き起こし、進歩的政府のポピュリスト的・抑圧的性質に対する不満が蓄積し、ローカルなレベルでは、グローバルな商品ブームによって進められた鉱山活動の拡大に基づいたローカルな不満と動員が増加した。これらの抵抗は、通常、先住民や貧農、環

境主義者や周辺化された都市コミュニティによって導かれたが、これらのグループの取り込みや周辺化、抑圧にであった。一方、彼らは全国的社会運動の動員の潜在力を中立化するナショナルな貧困プログラムの成功のおかげで全国的には孤立していた。それゆえ、資源抽出への依存と包摂や多様性や民衆参加の諸原則への忠実な支持との間に基本的な分裂がある（Cannon and Kirby, 2012:200）。

#### ＜国家と多国籍企業に対する抵抗運動＞

採掘資本主義（extractive capitalism）に抵抗する中心的アクターの一つは共同体である。すなわち、採掘資本（extractive capital）の活動やそれに結びついた巨大プロジェクトに近接する先住民の他の共同体である。これらの諸勢力はその政治的方向性において、「反帝国主義的、反資本主義的、そして反-ポスト-新自由主義的になる傾向」（Veltmeyer and Petras, 2014b:243）がある。

採取企業の拡大は、農村共同体や環境組織などとの緊張の増大に導いた。エクアドルの国家収入の主要な源泉としての天然資源の開発への依存を止めなかった。経済学者で前鉱業大臣、アルベルト・アコスタ（Alberto Acosta）は開発政策をめぐる大統領と決裂した。彼は、「資源の呪い」をもたらす政府の開発政策に反対し、sumak kawsay ——ケチュア語で「よい生活」あるいは「よく生きる」の意味——の考え方を強調する（Becker, 2013:55）。

草の根組織は、生物多様性の貴重な資源が埋もれ、またワオラニ（Waorani）族の本拠地であるヤスニ（Yasuni）国立公園における石油開発を終わらせる交渉を試みた。2007年、ヤスニで対立が危機的事態に達した。コレアは混乱に強硬に対応し、反対派を阻止するために軍隊を派遣し、抵抗する人びとを非愛国的サボタージュであると非難した（Becker, 2013:56）。また、鉱業をめぐる紛争、水の民営化計画に反対する抵抗に対しても、コレアは社会運動との亀裂を拡大した（Becker, 2013:57）。

このように、土地や天然資源の所有、グローバル・コモンへのアクセスをめぐる異議申し立ては、今日、ラテンアメリカにおいて広範に見られる政治的特徴である。同時に、国家と多国籍企業に対する抵抗運動は多様な形態をとっている。例えば、それはビアー・カンペシーノ（小規模な貧農と家族農業にグローバルな運動）に代表される運動である。これは「ローカルな小規模生産や別の非資本主義的形態の開発及び貿易に向けられている」（Veltmeyer and Petras, 2014b:245）。

抵抗運動の大部分は反新自由主義、反帝国主義であるが、必ずしも反資本主義ではない。メルトマイヤーとペトラスが反資本主義や反帝国主義（同様に反新自由主義）として特徴づける抵抗運動に関して、彼らはチャベスの提案した国際的な貿易-ALBAの代替型（非新自由主義的）システム・モデルの回りに収斂してきた社会運動のネットワーク（「接合」）に注目する<sup>25)</sup>。

「チャベスの提案した国際的な貿易-ALBAの代替型（非新自由主義的）システム・モデル

は、まだ決定的な形を与えられていない。しかし、国内市場向け小規模生産組織と結びついた大規模輸出志向生産の国有化と社会化に適用されている。このモデル（チャベスの定式化では21世紀型社会主義）は、国家と大規模企業のレベルでの資本主義を超えて進み、社会主義——生産の国有化と社会化——を代替型の貿易関係システム（ALBA）と、ローカル市場向けの小規模な非資本主義的生産、農業のエコロジー革命、食糧主権への関心、そして「参加型民主主義」に基づく「下からの」コミュニティー・ベースの開発過程と結びつける必要性に関して現れつつあるラディカルなコンセンサスに基づいている。」

(Veltmeyer and Petras, 2014b:246-247) <sup>26)</sup>

結局、ベルトメイヤーとペトラスは、「新しい採掘主義 (new extractivism)」の本質を次のように指摘する。それは今日、「採掘部門における特に暴力的な打撃的形態をとる諸問題や諸条件に従っている」。この依存は「国家とグローバル資本との基本的な従属関係の、すなわち、政府の目的と関心、戦略が不可避的に資本の利益に従属する関係の種をまき散らしてきた」。それは「政府が進歩的な傾向やアジェンダによりマヌーバーの余地を減らす新たな形態の‘従属’である」と (Veltmeyer and Petras, 2014b:248)。

<中国：もう一つの新たな従属か協力か>

近年、中国のラテンアメリカへの接近は様々な意味で無視できない影響力を強めている (デイ・マシ/ビジャファーニェ, 2013)。グローバル経済の否定的影響とも関連するが、世界経済における中国の相対的重要性の拡大は議論する価値がある。第一に、とりわけ中国経済の持続的成長は、過去数年の間、鉱物や炭化水素の価格増大を支えてきた。第二に、中国は長期的な経済実績のためにこれらの諸資源を擁護する必要がある、こうして受入国との同盟を含めた重要な対外投資戦略を生み出してきた。そして最後に、経済的連携をUSAから離して多様性を残そうとする南アメリカの試みは、中国やロシアや他の大国の投資や膨脹を歓迎し、同じく多様な地域的統合プラットフォームを促進することになる (Rosales, 2013:1453)。

例えば、ベネズエラを一例として取りあげてみる。中国やロシア等の国々とのベネズエラのパートナーシップは拡大し、住宅のような他の公共部門への投資を含んでいた。それは2009年の景気後退からベネズエラを救い出し、チャベスの2012年の再選を保証するのに重要であった。新たな地政学的同盟はオリノコ川ベルトの重油の開発を拡大するためのローン協定に導いた。全体で、中央政府とPDVSAに貸し付けた中国開発銀行 (CDB) は360億ドルに達した。中国のベネズエラへの投資は増大し、同様に中国へのベネズエラの石油輸出は増大すると予測された。石油向け資金ローン・メカニズムの多くは、ベネズエラの輸出がCDB債務支払い (10年間の始めの約10万ドルから2013年には30万ドルへ) のために拡大せざるを得なかった。10年間の終わり前までに、日産100万バレル以上を中国に輸出することをベネズエラは期待された。この場合、ベネズエラの石油は中国の全石油輸入の約20%を占めるであろう。本質的に、

ベネズエラと中国の関係はベネズエラ石油へアクセスする中国の能力にかなり依存している（Rosales, 2013:1448）。

## 5. リージョナルなガヴァナンス構築

### 1) リージョナル・レベルにおける国家 - 社会関係

＜「社会的メルコスール（Social Mercosur）」＞

21世紀に入ってからのラテンアメリカの新しい国家・社会構想の流れには、市民社会の拡がりを背景に新自由主義に対する拒否や異議申し立てとポスト新自由主義への動きを促進してきた新しい社会運動の強まりがあった。だが、前章で論じたように、一次産品輸出への過度な依存から生ずる多くの「資源の呪縛」の問題や社会運動内部の対立をはじめ多くの困難を抱えている。こうした条件の中でとりわけ重要な課題は、国境を超えたリージョナル・レベルでの民衆の統合とガヴァナンスである。NAFTAとは距離を置く統合の在り方が問われており、また注目を浴びている所以である。そこで、本稿の最後に、メルコスールの社会化の側面に焦点をあててみたい。

ブリセニョ・ルイスは「社会的メルコスール（social Mercosur）」の発展を通じてリージョナル・レベルにおける国家 - 社会関係の転換を論じている。貿易自由化やグローバル経済への埋め込みのプロジェクトとしてのメルコスールという狭い経済的理解を超えて、工業化への協調がこの地域で如何に再出現するのか、また「国家 - 市民社会関係の考えの変化や民主化、グローバル化への対応がラテンアメリカにおける近年の地域統合の発展にどの程度影響を及ぼしてきたのか」（Briceño Ruiz, 2012:173）、こうした課題を検討している。

当初、メルコスールはネオリベラルなプロジェクトと見なされ、社会諸アクターによって厳しく批判されていた。メルコスールはグローバル化への対応、グローバル経済への参入を基盤にした対応、自由貿易と開かれた地域主義と考えられた。こうして、1991年にメルコスールを設立したアスンシオン条約（The Treaty of Asunción）は本質的に如何なる社会的目的もない貿易協定であった。メルコスールに採用されたこの地域統合モデルは、かなりの程度アスンシオン条約交渉に参加した政治的アクターの利害の結果であった。それは本質的に、新自由主義諸政府によって導かれた政府間交渉であり、そこには社会的アクターが参加しなかった。

ブリセニョはメルコスールの社会的次元の構築が複雑な過程を辿ったことを説得的に論じている。この過程で国家と市民社会はともに働いてきた。「底辺からの統合」あるいは「頂点からの統合」といった間違っただ二分法とは反対に、メルコスールは「地域統合過程内での社会的次元の追求に関心を示す市民社会と一定の政府部門とのプラグマティックな同盟」であると、この点を彼は強調する。この種の同盟は、萌芽的形態であるとしても、1990年代に存在した。当時、労働組合と労働大臣はメルコスールにおける社会—労働次元を構築するために一種の非

公式な同盟を形成した<sup>27)</sup>。しかしながら、この過程の現実的深化は2003年以降に起こった。当時、社会諸問題に強力に関与した新しい政府は、メルコスールにおける社会的次元の構築過程を始めた。新たな政府にとって、社会諸アクターの包摂は地域的な社会政策を進めることで地域統合過程を民主化する試みで合った。その結果、メルコスールはグローバル化の対応としての開かれた地域主義を基盤にした自由貿易協定であることを止めた。かわりに、新しい政府はグローバル経済の現実に対応する新たな方法を見いだそうとした。そこでは、社会的、生産的諸次元が貿易を補完する (Briceño Ruiz, 2012:174-175)。

#### <「社会的メルコスール」の構築へ>

ブラジルとアルゼンチンの新たな左翼政権は2003年以降、メルコスールの社会的次元の強化を推し進めた。2003年6月、ルーラとキルチネルは2003年6月、ブラジリアで会いブラジリア文書を結んだ。それは両国間の戦略的同盟の強化の必要性を繰り返し、貿易と制度的領域における諸改革を通じて統合過程の質的向上が基本的であること、ブロックの対外関係、社会的・生産的次元、地域的インフラの改善が議論された。両国家首脳は、メルコスールと南米の統合が経済成長、社会的正義、市民の尊厳が促進される地域統合モデルの構築を目標にされるべきであることを明言した (Briceño Ruiz, 2012:176)。

同年10月、両大統領は自立的で社会的な志向性を持つ発展を求め、グローバル化を管理する新たな戦略を定式化した。プエノスアイレス・コンセンサスである。

「地域統合はわれわれの国の世界への挿入を強化し、われわれの交渉力を高める戦略的な選択を守る。意思決定における大きな自律性は、われわれが投機的な金融資本による不安定化の動きならびに先進国ブロックの矛盾する利害を最も効果的に立ち向かうことを可能にするであろう。・・・こうして、われわれは南米の統合がすべての関係者の利益を促進し、その目的として、成長や社会的正義、そしてすべての市民の尊厳が同一歩調をとるような開発モデルの形成を目標としている。」(プエノスアイレス・コンセンサス、2003年10月16日)

2004年以降、メルコスールの社会的次元の創設には二つの過程が見られる。第一に、新たな現象、「社会的メルコスール」が現れた。第二は、いわゆる「南の民衆のサミット (Summits of the People of the South)」であった。

以下、プリセニョに研究に依拠してこの過程を紹介する。まず、最初に「社会的メルコスール」につて述べる<sup>28)</sup>。これは地域的ブロックの社会的次元の特別な側面を描いている。その目標は地域的な社会政策の発展であり、メルコスール諸国にとってのある種の地域的福祉プロジェクトである。他方、社会的領域における市民社会への新たな参加チャンネルが、特に2006年以降設立された。すなわち諸政府により推進された市民社会の参加のための空間であった (Briceño Ruiz, 2012:177)。

社会的メルコスールはこの地域の社会的諸問題を扱う制度、基準、政策の設立を目的にして

いる。それは再分配的措置を通じて平等を促進し、住民の排除されてきた部分が教育や保健、住宅、質の良い公共サービスへのアクセスを可能にする諸政策を実施するために創設された。それゆえ、社会的メルコスールは貧困を削減し、富を再配分し、社会正義を促進し、市場制度を規制するための福祉国家の諸措置に関係している（Vázquez, 2011）。

社会的メルコスールはナショナルなレベルでの政治的变化に一致していた。それは1990年代に採用された経済モデルを批判した共通の特徴の一つであった。この経済モデルへの批判は、2007年に承認されたモンテビデオ憲章（Carta de Montevideo）で再確認された。

「この統合過程は、1990年代初めに誕生したが、余りにも経済的なバイアスを持っていた。メルコスールはポピュリスト政権と数十年の権威主義体制の政治的・社会的・経済的な遺産に対処しなければならなかった。それは萌芽的な福祉国家に危機を引き起こした。これらの諸要素は地域の諸国における政治的・経済的不安定を継続し、貧困や歴史的な社会不平等の削減の障害ともなった。これらすべては1980年代と90年代の新自由主義的理念に基づく経済政策（ワシントン・コンセンサスのような）の押し付けによって悪化された。それは多くの場合、広範な社会諸セクターの排除と彼らの生活条件の不安定化に導いた。」  
（Declaración de Principios del Mercosur Social, 2007:3）

2006年12月、ブラジルで第1回メルコスール社会サミット開催をルーラ政府が組織した<sup>29)</sup>。それには約500の組織が参加した。以後、「社会サミット（首脳会談）」の波が發展した。社会サミットはモンテビデオ（2007）、アスンシオン（2007）、トゥクマン（2008）、サルバドル・デ・バイア（2008）、アスンシオン（2009）、モンテビデオ（2009）、チャコ（2010）、フォス・デ・イグアス（Foz de Iguazú）（2010）、アスンシオン（2011）で開催されてきた（Briceño Ruiz, 2012:183）。

こうした「社会的メルコスール」の發展・深化の過程に関して、ブリセニョ・ルイスは二つの結論を引き出している。第一に、メルコスールにおける市民社会のための空間創出は、かなりの程度左翼政府によって支配された諸国家のイニシアティブであった。第二に、これらすべての提案は当初、ナショナル・レベルで發展させられた。なぜなら、市民社会アクターとの対話者は統合政策に責任ある当局、とくに外務省であった（Briceño Ruiz, 2012:182）。

社会サミットの性格と方法論に関して批判が起こった。とくに、サミットが市民社会の参加のための空間として説明されたとしても、それは実際には公式なイベントであり、その中心的な目的は政府と生産的アクターとのコミュニケーション・チャンネルを確立することにあった。社会サミットの方法論に関して、問題はそれらが真の参加空間であるかどうかに関して起こってきた。社会サミットが社会アクターと国家との情報交換と対話の場にすぎないと、批評家は主張している（Almany and Leandro, 2006 参照）。

これらの批判にもかかわらず、社会サミットは社会諸アクターの政治的動員のための空間と

なってきた。彼らはその見解を提示し、メルコスールの経済モデルを批判し、その利害と見通しがうまく代表される新しいタイプの地域統合の提案をすることが可能となってきた。しかし、いわゆる「内部アクター」は政府により創出されたこれらの空間に参加してきた人々であった。「外部アクター」は別の空間に参加することを選択してきた。すなわち、南の民衆のサミットである (Briceño Ruiz, 2012:183)。

## 2) 民衆によるリージョナル・ガバナンス構築への動き

### <南の民衆のサミット>

いわゆる南の民衆のサミットは、FTAA交渉の文脈で1997年に設立された同盟 (Alianza), 「大陸規模の社会同盟」 (Hemispheric Social Alianza :HSA) を起源にしている。HSAのまわりに組織された社会運動やNGOのネットワークは、地域統合のFTAAモデルを拒否し、「もう一つの世界は可能だ」というスローガンのもとに、健康や教育や社会的統合、平等のような民衆の具体的諸問題を扱う新しい地域統合モデルを提案した。

HASは、政府によって組織されたサミットに参加する代わりに、それ自身の参加空間を創出した。これが南の民衆のサミットと呼ばれる並行サミットであった。2006年12月に開かれたボリビアのコチャバンパでのサミットは、「南の民衆のサミット」の開始であった。そこにおいて、HASと他の「アウトサイダー」は重要な役割を果たした。コチャバンパの後、「南の民衆のサミット」はサンチャゴ(2007)、アスンシオン(2007)、モンテビデオ(2007)、リマ(2008)、アルゼンチンのポサダス(2008)、サルバドル・デ・バイーア(2008)、アスンシオン(2009)に開催された。HASによって組織されたこれらの会議は、「ラテンアメリカで近年発展してきたメルコスールの徹底的な再構成と他の地域統合イニシアティブを求める急進的な戦略を選択した」 (Briceño Ruiz, 2012:184)。

### <「社会的メルコスール」と民主主義の強化>

メルコスールにおける強い社会的次元の強化は、民主主義の強化への諸国家の関与の一部として、諸国家により誘発された。新しい政府にとって、市民社会との同盟はこの戦略の柱の一つであった。政府の行動は二つの面があった。一方で、メルコスールの社会的次元を理解する新たなアプローチの発展、他方で、市民社会参加への空間の創出、である。

新たなこのアプローチの採用は、地域統合の社会的次元が貿易自由化によって影響を受けてきた社会諸部門に補償することを目的にした。左翼政府により進められたこの新しいアプローチは、リージョナリズム自体の理念を転換しようとした。そして、それは貿易に中心を置くことをやめ、代わりにメルコスール過程の社会的・生産的諸次元に焦点を合わせた。この意味で、「メルコスールの社会的・生産的次元」はグローバル化への新たな対応方法を意味していた (Briceño Ruiz, 2012:185)。

市民社会参加への空間の創出は統合過程を民主化する試みでもある。同時に、メルコスールの経験は、国家と市民社会が自由貿易と新自由主義を超えて進む統合モデルの構築においても働けることを示している。南の民衆のサミットの創設は、市民社会の一定の部門が政治行動のためのそれ自身の空間を創出するための手段であった（Briceño Ruiz, 2012:185）。それは進行中のメルコスールの転換が地域における政治的機会構造の変化の結果と主張できる。

このようなイニシアティブは前述の議論、とりわけ新しい採掘主義（New Extractivism）と「資源の呪い」に関わる諸問題が注目されているなかで、メルコスールが新自由主義を超え、新しい民主的なリージョナル・ガバナンス構築に向けてどの程度進むのか、興味深い問題を提起している。同時に、今後の行方を注意深く見守る必要がある。ナショナル・レベルでの国家-社会関係の民主的構築はリージョナル・レベルでの民主的ガバナンスとシナジー関係にある。

#### おわりに

本稿では、ラテンアメリカにおける国家と開発の歴史的推移、とりわけ新自由主義の展開がこの地域に及ぼしてきたインパクトを踏まえて「新左翼」出現の背景を探り、その実態を「ポピュリズム」概念で分析する見解を批判的に検討した。それは、「新左翼」を急進的ポピュリズムと類型化する研究が広くみられるからである。本稿では「ポピュリズム」概念の有効性の限界を指摘したうえで、「国家-市民社会」関係と重層的ガバナンス構築の枠組みからのアプローチと分析が不可欠であるとの立場に立ち、そのことを前提として「ポピュリズム」のダイナミズムとその役割を考えた。その社会編成の多様かつ多次的な戦略・プロジェクトとして組み入れた。

また、体制側の制度的再編成の戦略＝「国家-市民社会」関係の再構築の視点からポスト新自由主義に向けたガバナンス構築の現在と可能性した。そこでは、自律的「国家-市民社会」関係の発展、国家の役割再考、社会運動と国家、資本やグローバル市場と関わる財政問題、そして米州というリージョナルなレベルでのガバナンス構築、これらの問題が課題になると指摘した。

本稿は多岐にわたる論点を検討したため、若干、焦点が曖昧になった感がある。この点を認識したうえで、最後に、これまでの議論をまとめておきたい。キャノン等の著書（Cannon and Kirby, 2012）は本稿の視点とアプローチにかなり一致している。彼らは「民主化が依拠する国家-市民社会関係の永続的編成におけるローカルなこと、ナショナルなこと、グローバルなことの複雑な弁証法的相互関係性」を論証した。以下、彼らの指摘も踏まえて、まとめに代えたい。

第一に、ナショナルな市民社会内で一定の社会運動を発展させるために必要な集権的・垂直的ガバナンス構造を変えることが容易ではない。市民社会が「同質的なアクターではなく、新しい左翼的国家は様々な点で市民社会アクター内部にさらなる分裂を創り出しており、あるアクターを特権化し、他を周辺化している。この困難は少なからず持続するネオリベラル型グローバル化の切迫した要請に拠っている。また、ナショナルな市民社会とこれらの政治的要素は密接のそれに結びついている。それは資本の自律性を最大限にするためにこうした垂直的権力関係を鼓舞している」(Cannon and Kirby, 2012:202)。

第二に、こうした構造的束縛にも拘らず、市民社会の強力なアクターは、暮らしを掘り崩す国家の行動に異議申し立てをしようとしている。この点には注意が払われるべきであろう。なぜなら、市民社会の役割は、熟議や異議申し立てを通じて意思決定をするための単なる意見形成を超えて進んできた。左翼政権は、一方で、社会運動によって結びつけられた民衆の諸要求と、他方で、大資本の市場志向やグローバルな要求との間で選択を迫られてきた。この選択は、「現代ラテンアメリカにおける民主化過程の成否にとって、また将来のポスト・ネオリベラルの形成にとってカギである。それは多くの緊張を持っているが、社会的転換と民主化の深化に向けた可能性をも持つ魅力的な空間である。他方、民主主義、市民権、ラテンアメリカの民主化の軌跡を我々がどのように理論化するのか、この点での重要な諸問題を提起している」(Cannon and Kirby, 2012:202)。

第三に、新自由主義が強力な支配をしていた時代は終わりつつあり、国家権力はかなり縮小した。他方、企業の経済勢力が劇的に拡大した。強力なレトリックと民族主義立場にもかかわらず、左翼政府はいずれも輸出や外国貿易や投資を規制する厳しい努力をしてこなかった。民営化への歩みは止まったが、外国企業や国内企業の国有化へ向けた動きは少ない。従って、「市場との関係で国家の役割を‘再構築’しようとするポスト・ネオリベラル政策」が、国家を「飼い慣らす」ポスト・ネオリベラル的プロジェクトを傷つけることになりうる (Cannon and Kirby, 2012:190)。前者が不可避免的に後者を負かす可能性をどのように阻止するのか、緊急の課題であろう。

第四に、グローバル化の文脈で、貧困削減のために左翼政府の採掘産業への依存が民衆の生活と願望を、とくに、ローカル・レベルやこうした産業活動に関わるインディヘナ集団のそれと矛盾をきたしている。この問題は「参加の精神と実践」を裏切っていることになる。

国内レベルおよび米州ボリバル同盟 ALBA-TCP 貿易と連帯アソシエーションは、ナショナルおよびリージョナル・レベルの双方でネオリベラル秩序とリベラル秩序に対するオルタナティブを提供できるのか。ALBA-TCP を通じて「地域規模での新しい形態の国家 - 市民社会関係」の採用が計画されている。それはネオリベラル型グローバル化への直接的な異議申し立てである (Cannon and Kirby, 2012:194)。

注

- 21) ブラジル (Abers, 2000; Baiocchi, 2003:2005; Wampler, 2007; Wampler y Avritter, 2005) のほかにベネズエラの事例 (Consejos Comunales), メキシコの事例 (Consejos consultivos), さらにウルグアイ, ベネズエラ, ボリビアでは国民投票 (plebiscitos), 拒否投票 (referendos revocatorios), 市民的発案 (iniciativas ciudadanas) が促進されている (Maxwell, Hershberg y Sharpe, 13-14)。
- 22) カルフォルニアの成功した市民的イニシアティブ (立法府の課税権限への規制, マリファナの医療への使用の解禁) の支持者が躊躇なくみとめるように。
- 23) “extractivism” は, 金と銀のような金属採掘, 銅, 亜鉛, 鉛, 錫, ボーキサイト, 石炭, 鉄を含む鉱物採取以上のものを含んでいる。
- 24) new extractivism に関する見解において, グディナス (Gudynas) は国家の発展に向けた採掘型アプローチがこの地域の新自由主義政権とポスト新自由主義政権の両方で共有されていることに注目する。しかし, 彼もわれわれも強調するように, この採掘主義は二つの異なる形態をとっている。すなわち, 一つはコロンビアとメキシコに具体化されたものである。そこでは支配体制はワシントン・コンセンサスとアメリカ帝国主義の勢力範囲で国家発展に向けた新自由主義的道に従い続けている。もう一つの形態は, 本書ではアルゼンチン, ボリビア, エクアドルに代表される。「進歩的採掘主義」や「ポスト新自由主義型開発主義」と述べられた事例をなしている。しかしながら, ここで, 公共政策が「プラグマティックな新自由主義」(ポスト-新自由主義的規制主義と進歩的採掘主義の穏健でプラグマティックな形態) から記述されうるモデルに運動されているアルゼンチンの事例 (ブラジルやチリ, ウルグアイも同様) と, 「21世紀の社会主義」と一部では理解されていることに向かう進歩的採掘主義のより急進的な形態を例示していると考えられうるボリビアやエクアドル (ベネズエラとともに) との間に一つの区別がなされるべきである (Veltmeyer and Petras, 2014:225)。
- 25) 2013年5月16日から20日, 22か国の社会運動の代表が集まり, この同盟の原則の回りに構築された大陸規模の行動プランを討議した。それは「多国籍企業と民営化過程に反対して闘うために」, また「母なる大地の諸権利を守りよく生きるため」と「国際連帯」の必要性を含んでいる (Minga Informative de Movimientos Sociales)。大陸規模の社会運動ネットワーク (Social Movements for ALBA) のこの創立大会において, このネットワークの反システムの性格は, 民衆運動の多様な諸部門——先住民共同体, 貧農組織, 組織労働者階級, 土地なし農村労働者, プロレタリア化した農村の貧民, インフォーマル・セクターのセミ・プロレタリアートである路上労働者, 中間階級 (知識人と専門家, 大学生, 青年, 小ビジネス作業員, NGOの市民社会) ——を資本主義, 帝国主義, 家父長制に反対するプログラムの回りに統一し動員する必要の声明の中に結びつけられている (Veltmeyer and Petras, 2014b:245)。
- 26) 新しい採掘主義をめぐる最近の議論には係争中の三つのモデルがある。一つは大規模な外国投資, 民間部門の成長, 積極的な国家支援をベースにした「包摂型成長 (inclusive growth)」を追求する形態をとってきた。このモデルは, 自由市場資本主義と民間部門主導型開発の効率に関するワシントン・コンセンサス (今ではダボス会議) に基づいている。それは多様な形で与えられている。  
ネオ構造主義的タイプの第二のモデルは, 進歩的採掘主義や包摂的發展 (inclusive development) (資源ナショナリズムや包摂型の国家積極行動主義) の形態で, ECLACのエコノミストにより構築されてきた。このモデルは「国家を連れ戻す」必要性についてのポスト-ワシントン・コンセンサスに基づいている。そして, 極貧削減に関心を示し, それに焦点を合わせたより包摂的な開発形態 (「新しい開発主義」) をもたらすために「国家と市場のより良いバランス」を創り出す。新しい開発主義は,

貧民が自分自身のために行動するためのエンパワーメントを企図し、国家が社会発展に向けた責任をとることを可能にし、国際協力と社会参加によって、市民社会が開発過程に従事してその過程を促進することを企図している。しかし、そうであっても、草の根組織や社会運動は政府や意思決定過程から排除され続ける。それは現れつつあるラディカルなコンセンサス——新自由主義を超えるのみならず資本主義をも超えて進む必要性に関して——の主張者が変化を求めるひとつの状況である (Veltmeyer and Petras, 2014b:246)。

- 27) メルコスールは1990年代に「社会-労働メルコスール」(労働部門や教育部門)として発展したが、それは潜在的に否定的な統合の影響への対応と考えられていた。すなわち、USAにより推進されたFTAA過程が合衆国政府と多国籍企業に有利と考えられ、メルコスールもまた社会的諸問題についての限定的成果ゆえに批判された。この批判は、米州自由貿易地域 (FTAA) に異議申し立てする地域的運動の文脈における市民社会のアクターによって追求されたグローバルな戦略の一部であった (Briceño Ruiz, 2012:175)。
- 28) 「社会的メルコスール」の発展・深化の過程は、Briceño Ruiz (2012:179-183) で概要がわかる。
- 29) 第1回メルコスール社会サミットの開催については、アルゼンチン政府からのコルドバ (2006年6月) であるとの批判がある。

#### 【参考文献】

- Abres, Rebecca N. (2000). *Inventing Local Democracy: Grassroots Politics in Brazil*, Lynne Rienner Publishers.
- Abts, Koen and Stefan Rummens (2007). "Populism versus Democracy", *Political Studies*, Vol.55, pp.405-424.
- Ackerman, Bruce (1988). "Neo-federalism?", in Elster and Slagstad, (eds.). *Constitutionalism and Democracy*, Cambridge, Cambridge University Press.
- Alvarez, S. E., E. Dagnino, and A. Escobar (1998). "Introduction: the cultural and the political in Latin American social movements", in Alvarez, S. E., E. Dagnino, and A. Escobar (eds.). *Culture of Politics — Politics of Culture: Revisioning Latin American Social Movements*, Boulder, C.O, Westview Press, pp.1-29.
- Arditi, Benjamin (2003). "Populism or Politics at the Edges of Democracy", *Contemporary Politics*, 9 (1), pp.17-31.
- (2008). "Arguments About the Left Turns in Latin America: A Post-Liberal Politics", *Latin American Research Review*, 43 (3), pp.59-81.
- Arnson, Cynthia J. with Jose Raul Perales (eds.) (2007). *Democratic Governance and the "New Left" , in Latin America*, Washington, D.C.: Latin American Program, Woodrow Wilson International Center for Scholars.
- Avritzer, Leonardo (2002). *Democracy and the Public Space in Latin America*, Princeton University Press.
- (2005). "Modes of Democratic Deliberation: Participatory Budgeting in Brazil", in Santos, Boaventura de Sousa (ed.), *Democratizing Democracy: Beyond the Liberal Democratic Canon*, London, Verso.

- (2006). “New public spheres in Brazil.” *International Journal of Urban Regional Research*, vol. 30, no. 3, pp. 623-37.
- (2009). *Participatory Institutions in Democratic Brazil*, Washington, D. C. Woodrow Wilson Centre Press.
- Avritzer, Leonardo, (ed.) (2004). *A participação em São Paulo*. São Paulo: Editora UNESP.
- Avritzer, Leonardo, and Navarro, Zander (eds.) (2003). *A inovação democrática no Brasil: O orçamento participativo*. São Paulo: Cortez Editora.
- Avritzer, Leonardo, and Pereira, Maria de Lourdes Dolabela (2005). “Democracia, participação e instituições híbridas.” *Teoria and Sociedade* (UFMG), pp. 16-41.
- Baiocchi, Gianpaolo (2003). Participation, activism, and politics: The Porto Alegre experiment. In Archon Fung and Erik Olin Wright, ed, *Deepening democracy: Institutional innovations in empowered participatory governance*, pp. 45-76, London: Verso.
- (2005). *Militants and Citizen: The Politics of Participatory Democracy in Porto Alegre*, Stanford, California, Stanford University Press.
- Barrett, Patrick, Daniel Chavez and César Roríguez-Garavito eds. (2008). *The New Latin American Left: Utopia Reborn*, London, Pluto Press.
- Beasley-Murray, Jon ,Maxwell Cameron, and Eric Hershberg (2010). “Latin America’s left turns: A tour d’horizon”, in Maxwell A. Cameron and Eric Hershberg (eds.). *Latin America’s Left Turns: Politics, Policies & Trajectories of Change*, Lynne Rienner Publishers, pp.1-20.
- Bebbington, Anthony (ed.) (2012). *Social Conflict, Economic Development and Extractive Industry: Evidence from America*, London, Loutledge.
- Becker, Marc (2013). “The Stormy Relations between Rafael Correa and Social Movements in Ecuador”, *Latin American Perspectives*, Vol.40, No.3, May 2013, pp.43-62.
- Bobbio, Norberto (1987). *The future of democracy: A defence of the rules of the game*. Mineapolis: University of Minnesota Press.
- Boron, Atilio A. (2008). “Promises and challenge: the Latin American Left at the start of the twenty – first century”, in P. Barrett, D. Chavez, and C. Rodríguez-Garavito (eds.), *The New Latin American Left: Utopia Reborn*, London, Pluto, pp.232-55.
- Boulding, C. and B. Wampler (2010). “Voice, votes, and resources: evaluating the effect of participatory democracy on well-being”, *World Development*, 38 (1), pp.125-135.
- Briceño Ruiz, José (2012). “New left governments, civil society and constructing a social dimension in Mercosur”, in Barry Cannon and Peadar Kirby eds. (2012). *Civil society and the state in left-led Latin America: challenges and limitations to democratization*, Zed Books, pp.173-186.
- Burdick, John, Philip Oxhorn, and Kenneth M. Roberts (eds.) (2009). *Beyond Neoliberalism in Latin America? :Societies and Politics at the Crossroads*, Palgrave Macmillan.
- Cameron, Maxwell A. (2009). “Latin America’s Left Turns: Beyond Good and Bad”, *Third World Quarterly*, Vol.30, No.2, pp.331-48.
- Cameron, Maxwell A. and Kenneth E. Sharpe (2010). “Andean left turns: constituent power and constitution making”, in Cameron, Maxwell A. and Eric Hershberg, eds. *Latin America’s Left Turns: Politics, Policies & Trajectories of Change*, Lynne Rienner Publishers, pp.61-78.

- eds. (2010). *Latin America's Left Turns: Politics, Policies & Trajectories of Change*, Lynne Rienner Publishers.
- (2012a). *Nuevas instituciones de democracia participativa en América Latina: la voz y sus consecuencias*, México, FLACSO México.
- (2012b). "Institutionalized Voice in Latin American Democracies", in Cameron, Maxwell A., Eric Hershberg and Kenneth E. Sharpe (eds.). *New Institutions for Participatory Democracy in Latin America: Voice and Consequence*, Palgrave Macmillan, pp.231-250.
- (2012c). "Voces y consecuencias: participación directa y democracia en América Latina", en Cameron, Maxwell A., Eric Hershberg y Kenneth E. Sharpe (eds.) (2012a). *Nuevas instituciones de democracia participativa en América Latina: la voz y sus consecuencias*, México, FLACSO México. pp.13-38.
- Cameron, Maxwell A. , Eric Hershberg and Kenneth E. Sharpe (eds.) (2012b). *New Institutions for Participatory Democracy in Latin America: Voice and Consequence*, Palgrave Macmillan.
- Cammack, Paul (2000). "The Resurgent of Populism in Latin America", *Bulletin of Latin American Research*, 19 (2).
- Cannon, Barry (2009). *Hugo Chávez and the Bolivarian Revolution: Populism and Democracy in a Globalized Age*, Manchester University Press.
- Cannon, Barry and Peadar Kirby (2012). "Civil society-state relations in left-led Latin America: deepening democratization ? ", in Barry Cannon and Peadar Kirby eds., *Civil society and the state in left-led Latin America: challenges and limitations to democratization*, Zed Books, pp.189-202.
- Canovan, Margaret (1981). *Populism*, New York, Harcourt Brace Jovanovich.
- (1999). "Trust the People! Populism and the Two Faces of Democracy", *Political Studies*, 47 (1), pp.2-16.
- (2002). "Taking Politics to the People: Populism as the Ideology of Democracy", in Y. Mény and Y. Surel (eds.). *Democracies and the Populist Challenge*, New York, Palgrave, pp.25-44.
- (2005). *The People*, Cambridge, Polity Press.
- Castañeda, Jorge G. (2006). "Latin America's left turn", *Foreign Affairs*, 85 (3), pp.28-43.
- Castañeda Jorge G. and Marco A. Morales (eds.) (2008). *Leftovers : Tales of the Latin American Left*, Routledge.
- Centellas, Miguel (2010). "Savina Cuéllar and Bolivia's new regionalism", *Latin American Perspectives*, Vol.37, No.4, pp.161-176.
- Coelho, V. S. R. P. (2004). "Conselhos de saúde enquanto instituições políticas: O que está faltando?" ] In Coelho, Vera Schattan R. P., and Nobre, Nobre, eds. *Participação e deliberação*. SãoPaulo: 34 Letras, pp. 255-69.
- Cohen, Jean L., and Arato, Andrew (1992). *Civil society and political theory*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Collier, Ruth Berins and David Collier (1991). *Shaping the Political Arena*, Princeton, N.J., Princeton University Press.
- Conaghan, Catherine M. (2008). "Ecuador: Correa's plebiscitary presidency", *Journal of Democracy*, 19 (2), pp.46-60.

- Conniff, Michal L. ed. (2012). *Populism in Latin America*, Second Edition, Tuscaloosa, University of Alabama Press.
- Cornwall, A. and V.S. Coelho (eds.) (2007). *Spaces for Change? The Politics of Citizen Participation in New Democratic Arenas*, London, Zed Books.
- Correa, Rafael (2009). *Ecuador: From Banana Republic to No Republic. (Ecuador: de Banana Republic a la No República*, DEBOLSILLO, 2012).
- Crabtree, John (2013). "From the MNR to the MAS: Populism, Parties, the State, and Social Movements in Bolivia since 1952", in Carlos de la Torre, and Cynthia J. Arnson eds. (2013a). *Latin American Populism in the Twenty- First Century*, Woodrow Wilson Center Press and The Johns Hopkins University Press, pp.269-293.
- Cunha, Filho, Clayton Mendonça ,and Rodrigo S. Gonçalves (2010). "The National Development Plan as a political economic strategy in Evo Morales's Bolivia: accomplishments and limitations", *Latin American Perspectives*, Vol.37, No.4, pp. 176-196.
- Dagnino, Evelina (ed.) (2002). *Sociedade civil e espaços públicos noBrasil*, São Paulo,Paz e Terra / Unicamp.
- Dagnino, Evelina, Olvera, Alberto J.and Panfichi,Aldo (eds.) (2006). *A disputa pela construção democrática na América Latina*, São Paulo, Paz e Terra.
- Dangl, Benjamin (2007). *The Price of Fire: Resource War and Social Movements in Bolivia*, Oakland and Edinburgh, AK Press.
- (2010). *Dancing with Dynamite: social movements and state in Latin America*, Oakland, CA., Edinburg, Baltimore, MD:AK Press.
- de la Torre, Carlos (2010). *Populist Seduction in Latin America*, Center for International Studies , Ohio University.
- (2012). "Rafael Correa's government, social movements and civil society in Ecuador", in Barry Cannon and Peadar Kirby (eds.) (2012). *Civil society and the state in left-led Latin America: challenges and limitations to democratization*, Zed Books, pp.63-77.
- de la Torre, Carlos and Cynthia J. Arnson (eds.) (2013a). *Latin American Populism in the Twenty- First Century*, Woodrow Wilson Center Press and The Johns Hopkins University Press,.
- (2013b). "Introduction: The Evolution of Latin America Populism and the Debates Over Its Meaning" in Carlos de la Torre and Cynthia J. Arnson (eds.). *Latin American Populism in the Twenty- First Century*, Woodrow Wilson Center Press and The Johns Hopkins University Press, 2013.
- Di Tella, T. (1965). "Populism and Reform in Latin American", in C.Veliz (ed.). *Obstacles to Change in Latin America*, Oxford: Oxford University Press, pp.47-74.
- Diamond, L. (1999). *Developing Democracy: Towards Consolidation*, Baltimore, MD, and London, Johns Hopkins University Press.
- ECLAC (2007). *Economic Growth with Equity. Challenges for Latin America*, Santiago de Chile, United Nations.
- ECLAC (2012). *Statistical Yearbook for Latin America and the Caribbean*, Santiago de Chile: Economic Commission for Latim America and the Caribbean.

- Edwards Sebastian (2010). *Left Behind: Latin America and the False Promise of Populism*, The University Chicago Press.
- Ellner, Steve (2008). *Rethinking Venezuelan Politics: Class, Conflict, and Chávez Phenomenon*, Lynne Rienner Publishers.
- (2012). “The Distinguishing Features of Latin America’s New Left in Power: The Chávez, Morales, and Correa Governments”, *Latin American Perspectives*, Vol.39, No.1, pp.96-114.
- (2013a). “Latin America’s Radical Left in Power: Complexities and Challenges in the Twenty-First Century”, *Latin American Perspectives*, Vol.40, No.3, pp.5-25.
- (2013b). “Social and Political Diversity and the Democratic Road to Change in Venezuela”, *Latin American Perspectives*, Vol.40, No.3, pp.63-82.
- Ellner Steve and Daniel Hellinger (eds.) (2003). *Venezuelan Politics in the Chávez Era: Class, Polarization, and Conflict*, Lynne Rienner Publishers.
- Escobar, A. (2010). “Latin American at crossroads”, *Cultural Studies*, 24 (1), pp.1-65.
- Fernandes, Sujatha (2010). *Who Can Stop the Drums? Urban Social Movements in Chavez’s Venezuela*, Durham, Duke University Press.
- Flores- Macías, Gustavo A. (2012). *After Neoliberalism? : The Left and Economic Reforms in Latin America*, Oxford University Press.
- Fontana, Lorenza Belinda (2013). “On the Perils and Potentialities of Revolution: Conflict and Collective Action in Contemporary Bolivia”, *Latin American Perspectives*, Vol.40, No.3, May 2013, pp.26-42.
- Fraser, Nancy (1993). “Rethinking the public sphere: a contribution to the critique of actually existing democracy”, in C. Calhoun (ed.). *Habermas and the public sphere*. Boston, MA: MIT Press, pp.109-194. (「公共圏の再考—既存の民主主義批判のために」(キャルホーン, クレイグ編『ハーバースと公共圏』, 1999年, 所収)
- Fuentes, Claudio (1999). “Partidos y coaliciones en el Chile de los ‘90”, in Paul Drake and Iván Jaksic eds., *El Modelo Chileno: Democracia y Desarrollo en los Noventa*, Santiago de Chile: LOM Ediciones.
- Fung, Archon (2006). “Varieties of Participation in Complex Governance”, in *Public Administration Review*, December, pp.66-75.
- Fung A. and E. O. Wright (2003). *Deepening Democracy: Institutional Innovations in Empowered Participatory Governance*, London, Verso.2003.
- García Linera, Alvaro (2010). “Controlling State Power: An Interview with Vice President Álvaro García Linera” (by Linda Farthing), *Latin American Perspectives*, Vol.37, No.4, pp.30-33.
- Gaventa, John (2010). “Foreword”, in Thompson, Lisa and Chris Tapscott (eds.). *Citizenship and Social Movements: Perspectives from the Global South*, Zed Books.
- Germani, Gino (2003). *Autoritarismo, Fascismo y Populismo Nacional*, Buenos Aires, Temas.
- Goodale, Mark and Nancy Postero (2013). *Neoliberalism, Interrupted: Social Change and Contested Governance in Contemporary Latin America*, California, Stanford University Press.
- Gret, Marion and Y. Sintomer (2002). *Porto Alegre. A esperança de uma outra democracia*, São Paulo, Loyola.

- Gret, Marion and Sintomer (2005). *The Porto Alegre Experiment : Learning Lessons for Better Democracy*, London and New York, Zed Books.
- Grugel J, and P. Ruggirozzi (2012). "Post neoliberalism: rebuilding and reclaiming the state in Latin America", *Development and Change*, 43 (1). pp.1-21.
- Grugel Jean and Pía Ruggirozzi (eds.) (2009). *Governance After Neoliberalism in Latin America*, Palgrave Macmillan.
- Grugel Jean and Pía Ruggirozzi (2012). "Post neoliberalism: rebuilding and reclaiming the state in Latin America", *Development and Change*, 43 (1), pp.1-21.
- Gudynas, E. (2009). *Extractivismo, Política y Sociedad*, Quito, Ecuador, CAAP y CLAES.
- Habermas, Jurgen (1984). *Theory of communicative action*. Translated by Thomas McCarthy. Boston: Beacon Press.
- (1989). *The structural transformation of the public sphere*. Cambridge: Mass.: MIT Press.
- (1992). "Further reflections on the public sphere." In Calhoun, C., ed. *Habermas and the public sphere*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Harbermas, Jürgen (1989). *The structural transformation of the public sphere: An inquiry into a category of bourgeois society*, Cambridge, MA: MIT Press. (細谷貞雄・山田正行訳『公共性の構造転換』未来社, 1973年)
- (1996). *Between facts and norms: Contributions to a discourse theory of law and democracy*, MA: MIT Press (河上倫逸・耳野健二訳『事実性と妥当性——法と民主的法治国家の討論理論にかんする研究(上・下)』未来社, 2002-03年).
- Harvey, David (2005). *A Brief History of Neoliberalism*, New York, Oxford University Press.
- Hayward, J. (1996). "The Populist Challenge to Elitist Democracy in Europe", in Hayward (ed.). *Elitism, Populism, and European Politics*, Oxford, Clarendon Press, pp.10-32.
- Hirschman, Albert O. (1970). *Exit, Voice, and Loyalty: Responses to decline in Firms, Organizations and States*, Cambridge, Cambridge University Press.
- Huber, Evelyne and John D. Stephens (2012). *Democracy and the Left: Social Policy and Inequality in Latin America*, The University of Chicago Press.
- Huber, Evelyne, Jennifer Pribble, and John D. Stephens (2010). "The Chilean Left in Power: Achievements, Failures, and Omissions", in Kurt Weyland, Raul L. Madrid, and Wendy Hunter, *Leftist Governments in Latin America: Successes and Shortcomings*, Cambridge University Press, pp.77-97.
- Hunt, Sarah (2012). "Civil society participation: poverty reduction in Bolivia, Honduras and Nicaragua", in Barry Cannon and Peadar Kirby eds. *Civil society and the state in left-led Latin America: challenges and limitations to democratization*, Zed Books, pp.161-172.
- Ianni, Octavio (1975). *La Formación del Estado Populista en América Latina*, México D.F., ERA.
- ICCI (Instituto Científico de Culturas Indígenas) (2007). "Uno es el discurso...otra la realidad", *Boletín ICCI-Rimay* 9 (December), pp.2-6.
- Jara Reyes, René (2012). "State-civil society relations during student mobilization in Chile in 2006 and 2011", in Barry Cannon and Peadar Kirby eds. (2012). *Civil society and the state in left-led Latin America: challenges and limitations to democratization*, Zed Books, pp.94-108.

- Jessop, B. (2007). *State Power*, Cambridge, Polity Press.
- Johnston, Hank and Paul Almeida, (eds.) (2006). *Latin American Social Movement: Globalization, Democratization, and Transnational Networks*, Rowman & Littlefield Publishers, INC.
- Kazin, Michael (1995). *The Populist Persuasion: An American History*, New York, Basic Books.
- Keck, Margaret E. (1992). *The Workers' Party and Democratization in Brazil*, New Haven and London, Yale University Press.
- Kingston, Peter (2011). *The Political Economy of Latin America: Reflections on Neoliberalism and Development*, Routledge.
- Knight, Alan (1998). "Populism and Neo-Populism in Latin America, Especially Mexico", *Journal of Latin American Studies*, vol. 30, pp.223-48.
- Koen Abts and Stefan Rummens (2007). "Populism versus Democracy", *Political Studies*, Vol.55, pp.405-424.
- Kohl, Benjamin and Rosalind Bresnahan (2010). "Bolivia under Morales: National Agenda, Regional Challenges, the Struggle for Hegemony", *Latin American Perspectives*, Vol.40, No.3, pp.5-20.
- Laclau, Ernest (2005). *On Populist Reason*, London, Verso.
- Lechner, Norbert (2002). *Las sombras del mañana: La dimensión subjetiva de la política*, Santiago del Chile: LOM
- Lefort, C. (1986). *The Political Forms of Modern Society. Bureaucracy, Democracy, Totalitarianism*, Cambridge, Polity.
- Lefort, (1988). *Democracy and Political Theory*, Cambridge, Polity.
- Leubolt, Bernhard et al. (2012). "Re-evaluating participatory governance in Brazil", in Barry Cannon and Peadar Kirby eds. *Civil society and the state in left-led Latin America: challenges and limitations to democratization*, Zed Books, pp.78-93.
- Levitsky, Steven and Kenneth M. Roberts (2011). *The Resurgence of the Latin American Left*, The Johns Hopkins University Press.
- Lievesley, Geraldine and Steve Ludlam (eds.) (2009). *Reclaiming Latin America: Experiments in Radical Social Democracy*, Zed Books.
- Linz, J. and A. Stepan (1996). *Problems of Democratic Transition and Consolidation: Touthern Europe, South America, and Post-Communist Europe*, Baltimore and London, Johns Hopkins University Press.
- López Maya, Margarita and Alexandra Panzarelli (2013). "Populism, Rentierism, and Socialism in Twenty- First Century: The Case of Venezuela", de la Torre, Carlos and Cynthia J. Arnson eds. (2013a). *Latin American Populism in the Twenty- First Century*, Woodrow Wilson Center Press and The Johns Hopkins University Press, pp.239-268.
- Luna, Juan Pablo (2006). *Programmatic and Non- Programmatic Party-Voter Linkages in Two Institutionalized Party Systems: Chile and Uruguay in Contemporary Perspective*. Ph. D. diss., Department of Political Science, University of North Carolina, Chapel Hill.
- Macdonald, Laura and Arne Rucker (eds.) (2009). *Post-Neoliberalism in the Americas*, Palgrave Macmillan.
- Mainwaring, Scott, and Scully, Timothy (eds.) (1995). *Building democratic institutions: Party systems in*

- Latin America*. Stanford, Calif.: Stanford University Press.
- Mainwaring, Scott, Ana María Bejarano, and Eduardo P. Leongómez (2006). "The Crisis of Democratic Representation in the Andes: An Overview", in Mainwaring, Bejarano, and Leongómez, eds., *The Crisis of Democratic Representation in the Andes*. Stanford, Stanford University Press.
- Malloy, J. (1977). *Authoritarianism and Corporatism in Latin America*, Pittsburgh, PA: Pittsburgh University Press.
- Mann, Michael (1988). *State, Wars, and Capitalism: Studies in Political Sociology*, Oxford, Blackwell.
- Mann, Michael (1993). *The Sources of Social Power, Vol. II : The Rise of Classes and Nation-State, 1760-1914*, Cambridge University Press. (森本醇／君塚直隆訳『ソーシャルパワー：社会的な<力>の世界歴史Ⅱ——階級と国民国家の「長い19世紀」(下)——』NTT出版, 2005年)
- Maxwell A. Cameron, Eric Hershberg and Kenneth E. Sharpe (eds.) (2012). *New Institutions for Participatory Democracy in Latin America: Voice and Consequence*, Palgrave Macmillan.
- McCarthy, Michael M. (2012). "The Possibilities and Limits of Politicized Participation: Community Council, Coproduction, and *Poder Popular* in Chávez's Venezuela", in Maxwell A. Cameron, Eric Hershberg and Kenneth E. Sharpe (eds.) (2012a). *New Institutions for Participatory Democracy in Latin America: Voice and Consequence*, Palgrave Macmillan, pp.123-147.
- Melucci, Alberto (1996). *Challenging codes*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Mény, Y. and Surel, Y. (2002). "The Constitutive Ambiguity of Populism", in Mény and Surel (eds.). *Democracy and the Populism Challenge*, New York, Palgrave, pp.1-24.
- Montambeault, François (2012). "Learning to be Better Democrats? The Role of Informal Practices in Brazilian Participatory Budgeting Experiences", in Maxwell A., Hershberg and Sharpe, eds., (2012). *New Institutions for Participatory Democracy in Latin America: Voice and Consequence*, Palgrave Macmillan, pp.99-122.
- Montúfar César (2013). "Rafael Correa and His plebiscitary Citizen' Revolution", de la Torre, Carlos and Cynthia J. Arnson eds. (2013a). *Latin American Populism in the Twenty- First Century*, Woodrow Wilson Center Press and The Johns Hopkins University Press, pp.295-321.
- Morales, Waltraud Q. (2012). "Social movements and revolutionary change in Bolivia", in Prevost, Gary, Carlos Oliva Campos, and Harry E. Vanden (2012). *Social Movements and Leftist Governments in Latin America: Confrontation or Co-optation?*, Zed Books, pp.49-87.
- Mudde, Cas (2004). "The Populism Zeitgeist", *Government and Opposition*, 39, no.4, pp.541-63.
- Muhr, Thomas (2012). "Reconfiguring the state/society complex in Venezuela", in Barry Cannon and Peadar Kirby eds. *Civil society and the state in left-led Latin America: challenges and limitations to democratization*, Zed Books, pp.19-33.
- Munck, Ronaldo (2007). *Globalization and Contestation: The New Great Counter -Movement*, Routledge.
- Nem Singh, Jewellord T. (2012). "Chile's mining unions and the 'new left', 1990-2010", in Barry Cannon and Peadar Kirby (eds.). *Civil society and the state in left-led Latin America: challenges and limitations to democratization*, Zed Books, pp.141-157.
- O'Donnell, Guillermo (1978). "Reflection on the Patterns of Change in the Bureaucratic- Authoritarian State", *Latin American Research Review*, Vol.13, No.1, pp.3-38.
- (1994). "Delegative democracy", *Journal of Democracy*, Vol.5, No.1, pp.55-69.

- (1999). *Counterpoints: Selected essays on authoritarianism and democratization*. Notre Dame, IN: University of Notre Dame.
- (2003). "Horizontal Accountability: The Legal Institutionalization of Mistrust", in *Democratic Accountability in Latin America*, Oxford University Press, pp.34-44.
- (2004). "Why the Rule of Law Matters", *Journal of Democracy*, Vol.15, No.4, pp.5-19.
- O'Donnell, Guillermo, Osvald Iazzetta and Jorge Vargas Cullell (eds.) (2003). *Democracia, desarrollo humano y ciudadanía: Reflexiones sobre la calidad de la democracia en América Latina*, Rosario, Argentina Homo Sapiens Ediciones.
- Offe, Claus (1974). "Structural Problems of the capitalist state. On the selectiveness of political institutions". *German Political Studies*, no. 1, pp. 31-57.
- Ostrom, Elinor (2005). *Understanding institutional diversity*. Princeton, N.J.: Princeton University Press.
- Oxhorn, Philip D. (1995). *Organizing civil society in Chile*, University Park, Penn State Press.
- (1998). "Is the century of corporatism over? Neoliberalism and the rise of neopluralism", in Philip D. Oxhorn, and Glaciera Ducatenzeiler eds., *What Kind of Democracy? What kind of Market? Latin America in the Age of Neoliberalism*, University Park, Pennsylvania State University Press, pp.195-217.
- (2009). "Beyond Neoliberalism? Latin America's New Crossroads", in John, Burdick, Philip Oxhorn, and Kenneth M. Roberts (eds.) (2009). *Beyond Neoliberalism in Latin America? : Societies and Politics at the Crossroads*, Palgrave Macmillan, pp.217-33.
- Panizza, Francisco (2000). "New wine in old bottle? Old and New Populism in Latin America", *Bulletin of Latin America Research*, 19 (2).
- Panizza, Francisco ed. (2005). *Populism and Mirror of Democracy*, Verso.
- Panizza, Francisco (2013). "What Do We Mean When We Talk About Populism?", de la Torre, Carlos and Cynthia J. Arnson eds. *Latin American Populism in the Twenty- First Century*, Woodrow Wilson Center Press and The Johns Hopkins University Press, pp.85-115.
- Peruzzotti, Enrique (2013). "Populism in Democratic Times: Populism , Representative Democracy, and the Debate on Democratic Deepening", de la Torre, Carlos and Cynthia J. Arnson (eds.) (2013a). *Latin American Populism in the Twenty- First Century*, Woodrow Wilson Center Press and The Johns Hopkins University Press, pp.61-84.
- Petras, James and Henry Veltmeyer (2011). *Social Movements in Latin America: Neoliberalism and Popular Resistance*, Palgrave Macmillan.
- Polet, François (ed.) (2007). *The State of Resistance: Popular Struggles in the Global South*, Zed Books.
- Ponce J. and A. Acosta (2000). "La pobreza en la revolución ciudadana o ? pobreza de revolución ?", *Ecuador Debate*, 81 (December), pp.7-20.
- Prebish, R. (1950). *The Development of Latin America and Its Principal Problems*, New York, United Nations Economic Commission for Latin America.
- Prevost, Gary, Carlos Oliva Campos, and Harry E. Vanden (2012). *Social Movements and Leftist Governments in Latin America: Confrontation or Co-optation?*, Zed Books.
- Przeworski, Adam (1991). *Democracy and the market*. New York: New York University Press.

- Raby, D.L. (2006). *Democracy and Revolution: Latin America and Socialism Today*, London, Pluto Press.
- Riggiozzi, Pía and Jean Grugel (2009). "Conclusion: Governance after Neoliberalism", in Grugel, J. and Riggiozzi, P. (eds.) (2009). *Governance After Neoliberalism in Latin America*, Palgrave Macmillan, pp.217-230.
- Roberts, Kenneth M. (2006). "Populism, Political Conflict, and Grass-Roots Organization in Latin America", *Comparative Politics*, Vol.38, no.2, pp.127-48.
- Roberts, Kenneth M. (2007). "Repoliticizing Latin America: The Revival of Populist and Leftist Alternatives", *Woodrow Wilson Center Update on The Americas*, November 2007, <http://www.wilsoncenter.org/sites/default/files/repoliticizing.roberts.lap.pdf>.
- Roberts, Kenneth M. (2013). "Parties and Populism in Latin America", de la Torre, Carlos and Cynthia J. Arnson (eds.) (2013a). *Latin American Populism in the Twenty- First Century*, Woodrow Wilson Center Press and The Johns Hopkins University Press, pp.37-60.
- Rosales, Antulio (2013). "Going Underground: the political economy of the 'left turn' in South America", *Third World Quarterly*, Vol.34, No.8, 2013, pp.1443-1457.
- Ruiz, Rodríguez, Leticia (2006). "El Sistema de partidos chilenos: ? Hacia una deestructuración ideológica?", in Manuel A. Saez and Leticia R. Rodríguez eds., *Chile: Política y modernización democrática*. Barcelona, Ediciones Bellaterra, pp.73-110.
- Sader, Emir (2011). *The New Model: Paths of the Latin American Left*, London, Verso Books.
- Salman, Ton (2007). "Bolivia and the paradoxes of democratic consolidation", *Latin American Perspectives*, Vol.34, No.6, pp.111-130.
- Santos, Boaventura de Sousa (1998). "Participatory Budgeting in Porto Alegre: Toward a redistributive democracy." *Politics and Society*, vol. 4, pp. 461-510.
- (2002). "Orçamento participativo em Porto Alegre: Para uma democracia distributiva." In Santos, Boaventura de Sousa, ed. *Democratizar a democracia*. Rio de Janeiro: Civilização Brasileira, pp. 455-559.
- (2005). "General Introduction—Reinventing Social Emancipation: Toward New Manifestos" in Santos (ed.). *Democratizing Democracy: Beyond the Liberal Democratic Canon*. London, Verso.
- (2006). *Democratizing democracy: Beyond the liberal democratic canon (reinventing social emancipation: Towards new manifestos)*. London: Verso Press.
- (2006). *The Rise of the Global Left: The World Social Forum and Beyond*, Zed Books.
- Santos, Boaventura de Sousa (ed.) (2005), *Democratizing Democracy: Beyond the Liberal Democratic Canon*. London, Verso.
- Santos, Boaventura de Sousa and Avritter, Leonardo (2005). "INTRODUCTION: Opening Up the Canon of Democracy" in Santos (ed.). *Democratizing Democracy: Beyond the Liberal Democratic Canon*. London, Verso.
- Santos, Boaventura de Sousa, and Avritter, Leonardo (2006). "Opening up the canon of democracy". In Santos, Boaventura de Sousa, ed. *Democratizing democracy: Beyond the liberal democratic canon (reinventing social emancipation: Towards new manifestos)*. London: Verso Press.
- Schamis, Hector E. (2013). "From the Perons to the Kirchiners: "Populism" in Argentine Politics", de la

- Torre, Carlos and Cynthia J. Arnson eds. (2013a). *Latin American Populism in the Twenty- First Century*, Woodrow Wilson Center Press and The Johns Hopkins University Press, pp.145-178.
- Schilling-Vacaflor, Almut and David Vollrath (2012). "Indigenous and peasant participation in resource governance in Bolivia and Peru", in Barry Cannon and Peadar Kirby eds. *Civil society and the state in left-led Latin America: challenges and limitations to democratization*, Zed Books, pp.126-140.
- Schneider, Sérgio, Marcelo Kunrath Silva, and Paulo Eduardo Moruzzi (eds.) (2004). *Políticas públicas e participação social no Brasil rural*. Porto Alegre: Editora da UFRGS.
- Selznick, Philip (1984). *TVA and the Grass Roots: A Study of Politics and Organization*, Berkley, University of California Press.
- SENPLADES (2009). *Plan Nacional para el Buen Vivir 2009-2013: Construyendo un Estado Plurinacional e Intercultural*.
- Seoane, José, comp. (2003). *Movimientos sociales y conflict en América Latina*, Buenos Aires, CLACSO.
- Silva, Eduardo (1993). "Capitalist Coalitions, the State, and Neoliberal Economic Restructuring: Chile, 1973-88", *World Politics*, Vol.45, No.4, pp.526-559.
- (1996). "From Dictatorship to Democracy: The business-State Nexus in Chile's Economic Transformations, 1975-1994", *Comparative Politics*, pp.28-3.
- (2009). *Challenging Neoliberalism in Latin America*, Cambridge University Press.
- Smilde, David and Daniel Hellinger (eds.) (2011). *Venezuela's Bolivarian Democracy: Participation, Politics, and Culture under Chávez*, Duke University Press.
- Stahler-Sholk, Richard, Harry E. Vanden, and Glen David Kuecker (eds.) (2008). *Latin American Social Movements in the Twenty-First Century: Resistance, Power, and Democracy*, Rowman & Littlefield Publishers, Inc.
- Stepan, A. (1978). *The State and Society. Peru in Comparative Perspective*, Princeton, NJ: Princeton University Press.
- Taggart, Paul (2000). *Populism*, Buckingham, Open University Press.
- Taguieff, P.A (1995). "Political Science Confronts Populism: From a Conceptual Mirage to a Real Problem", *Telos*, 103, pp.9-43.
- Tännsjö, T. (1992). *Populist Democracy: A Defence*, London, Routledge.
- Tatagiba, Luciana (2002). "Os conselhos gestores e a democratização das políticas públicas no Brasil". In Dagnino, Evelina, ed. *Sociedade civil e espaços públicos no Brasil*. São Paulo: Paz e Terra.
- Tendler, Judith (1997). *Good government in the tropics*. Baltimore, Md.: The Johns Hopkins University Press.
- UNDP (2011). *Human Development Report*, Oxford, Oxford University Press (横田洋三／秋月弘子／二宮正人監修『人間開発報告 2011：持続可能性と公平性——より良い未来をすべての人に』阪急コミュニケーションズ)。
- UNDP Bolivia (2010). *Los caminos detras del camino: Desigualdades y movilidades social en Bolivia. Informe Nacional de Desarrollo Humano en Bolivia*, La Paz:UNDP.
- Urbinati, Nadia (1998). "Democracy and Populism", *Constellations*, 5, no.1, p.116.
- Veltmeyer, Henry (2007). *Ilusion or Opportunity: Civil society in the quest for social change*. Halifax,

- Fernwood Publishing.
- Veltmeyer, Henry and James Petras (eds.) (2014). *The New Extractivism: A post-neoliberal development model of imperialism of the twenty-first century ?* Zed Books,Ltd.
- (2014a). “A New Model or Extractiv Imperialism?”, in Veltmeyer and Petras (eds.). *The New Extractivism: A post-neoliberal development model of imperialism of the twenty-first century ?* Zed Books,Ltd.,pp.21-46.
- (2014b). “Theses on Extractive Imperialism and the post-neoliberal state”, in Veltmeyer and Petras (eds.). *The New Extractivism: A post-neoliberal development model of imperialism of the twenty-first century ?* Zed Books,Ltd.,pp.222-249.
- Vitale, D (2004) “Democracia semi-directa no Brasil pós-1988: A experiência do orçamento participativo.” Faculdade de Direito. Departamento de Filosofia e Teoria Geral do Direito. Universidade de São Paulo (USP). Tese de Doutorado.
- Wampler, Brian (2007). *Participatory Budgeting in Brazil: Contestation, Cooperation, and Accountability*, The Pennsylvania State University.
- Wampler, Brian, and Avritzer, Leonardo (2004). “Participatory publics: Civil society and new institutions in Democratic Brazil”, *Comparative Politics* Vol. 36, No. 3 (Apr., 2004), pp. 291-312
- Wang, Xu (1993). “Mutual Empowerment of State and Society: Its Nature, Conditions, Mechanisms, and Limits”, *Comparative Politics*, Vol.31, No.2.
- Warren, Mark E. (2009). “Governance-driven democratization”, *Critical Policy Studies*, Vol.3, No.1, April 2009, pp.3-13.
- (2012). “Prefacio” en Cameron, Maxwell A. , Eric Hershberg y Kenneth E. Sharpe,eds. (2012a). *Nuevas instituciones de democracia participative en América Latina: la voz y sus consecuencias*, México, FLACSO México, pp. 9-12.
- Webber, Jeffery (2011). *From Rebellion to Reform in Bolivia: Class Struggle, Indigenous Liberation, and Politics of Evo Morales*, Chicago: Haymarket Book.
- Weyland, Kurt (1996). “Neopopulism and Neoliberalism in Latin America: Unexpected Affinities”, *Studies in Comparative International Development*, Vol.35, no.1, pp.3-31.
- (2001). “Clarifying a Contested Concept”, *Comparative Politics*, Vol.34, no.1.
- (2013). “Populism and Social Policy in Latin America”, de la Torre, Carlos and Cynthia J. Arnson eds. (2013a). *Latin American Populism in the Twenty- First Century*, Woodrow Wilson Center Press and The Johns Hopkins University Press, pp.117-144.
- Weyland, Kurt, Raul L. Madrid, and Wendy Hunter (eds.) (2010). *Leftist Governments in Latin America: Successes and Shortcomings*. Cambridge University Press.
- Wylde, Christopher (2012). *Latin America after Neoliberalism: Developmental Regimes in Post-Crisis States*, Palgrave Macmillan.
- Wylde, Christopher (2012). “State-civil society relations in post-crisis Argentina”, in Barry Cannon and Peadar Kirby eds. *Civil society and the state in left-led Latin America: challenges and limitations to democratization*, Zed Books, pp.34-47.

### <日本語文献>

- 遅野井茂雄・宇佐見耕一編 (2008) 『21世紀ラテンアメリカの左翼政権：虚像と実像』アジア経済研究所。
- 河原祐馬・島田幸典・玉田芳史編 (2011) 『移民と政治——ナショナル・ポピュリズムの国際比較』昭和堂。
- グランディン, グレグ (松下 冽監訳) (2006) 『帝国の実験場：ラテンアメリカ, 米国, そして新しい帝国主義の台頭』明石書店。
- 小池洋一 (2014) 『社会自由主義国家——ブラジルの「第三の道」——』新評論。
- 後藤政子 (1998) 「新自由主義と南の世界——社会運動の現在——」(『神奈川大学評論』第30号)。
- (1999) 「ラテンアメリカにおける変革の可能性——「社会主義革命」と「新自由主義革命」の挫折から——」(『神奈川大学評論』第33号)。
- (2010) 「『21世紀型社会主義』——ラテンアメリカにおける新しい社会理念の成立——」(『神奈川大学評論』第65号)。
- 坂口安紀 (2008) 「ベネズエラのチャベス政権——誕生の背景と「ボリバル革命」の実態——」(遅野井・宇佐見編『21世紀ラテンアメリカの左翼政権：虚像と実像』アジア経済研究所)。
- 島田幸典／木村 幹編著 (2009) 『ポピュリズム・民主主義・政治指導——制度的変動期の比較政治学』ミネルヴァ書房。
- デイ・マシ, ホルヘ・R.／ビクトル R. ビジャファーニエ (2013). 「グローバル化する中国は米州の国際関係を変えられるか」(松下 冽・山根健至『共鳴するガヴァナンス空間の現実と課題——「人間の安全保障」から考える——』晃洋書房)。
- ハーヴェイ, デヴィッド (渡辺 治監訳) (2005) 『新自由主義——その歴史的展開と現在——』作品社。
- ハーヴェイ, デヴィッド (本橋哲也訳) (2007) 『ネオリベラリズムとは何か』青土社。
- 林 和宏 (2007) 「ベネズエラにおける「地域住民委員会」の台頭——社会主義化と市民社会への介入——」(『ラテンアメリカ・レポート』Vol.24 No.2)。
- (2009) 「2008年ベネズエラ地方選挙——チャベス派の「敗北」が意味するもの——」(『ラテンアメリカ・レポート』Vol.26 No.1)。
- 高橋 進・石田 徹編 (2013) 『ポピュリズム時代のデモクラシー——ヨーロッパからの考察』法律文化社。
- 松下 冽 (1993) 『現代ラテンアメリカの社会と政治』日本経済評論社。
- (2003) 「ラテンアメリカの政治文化——ポピュリズムと民衆」(歴史学研究会編『国家像・社会像の変貌 現代歴史学の成果と課題 1980-2000年 II』青木書店)。
- (2007) 『途上国の試練と挑戦——新自由主義を超えて——』ミネルヴァ書房。
- (2007) 「ポスト新自由主義へ向かうラテンアメリカ」(『季刊現代の理論』, Vol.10, 1月)。
- (2008) 「グローバル・サウスにおけるローカル・ガヴァナンスと民主主義——参加型制度構築の視点と現状——」(『立命館国際研究』第20巻3号)。
- (2009) 「グローバル・サウスはグローバル化を飼い馴らせるか(上)——試論:グローバル／リージョナル／ローカルの重層的ガヴァナンス」(『立命館国際研究』第21巻3号, 3月)。
- (2009) 「グローバル・サウスはグローバル化を飼い馴らせるか(下)——試論:グローバル／リージョナル／ローカルの重層的ガヴァナンス」, 『立命館国際研究』第22巻1号, 6月)。
- (2009) 「ラテンアメリカの現状と国際政治——ポスト新自由主義と重層化する域内政治——」(『季刊現代の理論』, Vol.20, 7月)。
- (2012) 『グローバル・サウスにおける重層的ガヴァナンス構築——参加・民主主義・社会運動——』ミネルヴァ書房。

ラテンアメリカ「新左翼」はポピュリズムを超えられるか？（下）（松下）

——（2013）「市民社会と民主主義は越境型暴力に耐えられるか—— NAFTA における平和的ガバナンス構築——」（松下冽・山根健至編『共鳴するガバナンス空間の現実と課題：「人間の安全保障」から考える』晃洋書房,186-207 ページ）。

ムフ, シャンタル（2006）（葛西弘隆訳）『民主主義の逆説』以文社,（Chantal Mouffe, *The Democratic Paradox*, Verso, 2000.。）

村上勇介・仙石 学編（2013）『ネオリベラリズムの実践現場——中東欧・ロシアとラテンアメリカ——』京都大学学術出版会。

吉田 徹（2011）『ポピュリズムを考える——民主主義への再入門——』NHK 出版。

吉田秀穂（1992a）「チリの選挙制度の歴史的変遷に関する一考察（Ⅰ）」（『アジア経済』第33巻第11号,60-77 ページ）。

吉田秀穂（1992b）「チリの選挙制度の歴史的変遷に関する一考察（Ⅱ）」（『アジア経済』第33巻第12号,65-80 ページ）。

吉田秀穂（1997）『チリの民主化問題』アジア経済研究所。

（松下 冽 立命館大学国際関係学部教授）

## Can the New Latin American Lefts overcome Populism? (3)

Latin America has made progress toward more open and democratic political systems over the last three decades. Some democratic institutions have direct and popular participation which is different from the elected, representative institutions normally associated with democracy in Western Europe and North America. These new forms of popular political participation are giving voice to poor groups and those previously excluded. But this new wave of participations raises populism, which has the redemptive face of democracy, and its emotional style draws previously-excluded people into the political area. Recently Presidents Hugo Chávez of Venezuela, Evo Morales of Bolivia, and Rafael Correa of Ecuador have provoked passionate debates on the rebirth of radical-national populism.

This paper focuses on the possibilities and limits of the construction of democratic governance in the new Latin American Lefts from a perspective based on state- civil society relationships.

Chapter 1 examines the political and economic background of the resurgence of the Latin American Lefts. Chapter 2 explicates relationships between populism and those resurgent Lefts.

Chapter 3 examines affinities and ambiguities in the relationship between populism and democracy. Chapter 4 considers the possibilities and limits of participatory democracy including cases of radical populist regimes and social democratic groups. The final chapter looks at the construction of democratic governance beyond post-neoliberalism.

(MATSUSHITA, Kiyoshi, Professor, College of International Relations, Ritsumeikan University)